

【本日のお話し:内容】

イラン(かつてのペルシア)について:

- ① ペルシア/イランの 地理・歴史概説 – 予備知識として PDF版 1~14p.
- ② 19世紀~20世紀初頭におけるペルシアと周辺諸国の踏査記録  
 ― 中央アジアの覇権を巡って英露がしのぎ削っていた時代の、  
 S. ヘディンらによる報告書に見る当時の状況。 PDF版 15~54p
- ③ イランの自然と、デマバンド山(Mt.Damavand、公称5671m:または5610m) 登頂  
 (またはダマバンド) PDF版 55~108p
- ④ その遺跡紹介 シラーズ北東のペルセポリスなど、イスファハーン市内、アラムート、ほか PDF版 109~237p
- ⑤ イランの人々の日常・街の様子 – 米国の経済制裁下における PDF版 238~344p

スライド中では、現地の写真紹介がしばらく続くこともありますが、  
 そのために、時折は、お話しの筋が中断します。

写真: 酷乾のイラン高原空撮/長岡,2012.7



**紹介する写真：**写真は、特に出典を記したもののほかは、長岡正利・2012年7月の撮影。  
(ひょっとして、記載漏れがあるかも知れませんが。)

**イランの現況：人々と街のようす**  
入国から、テヘラン、シラーズ、イスファハーン

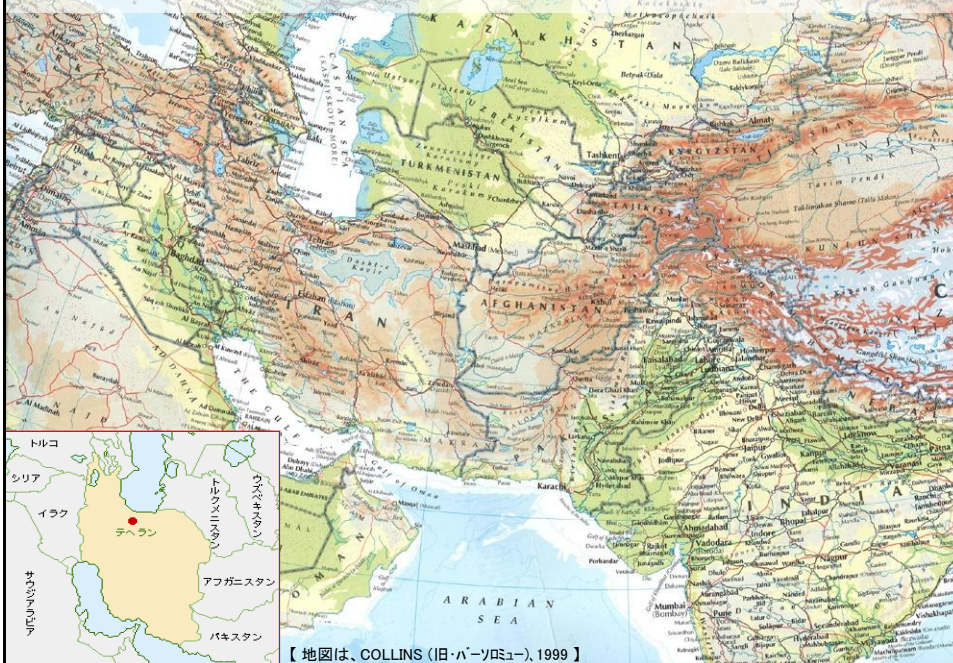
**イラン各地の遺跡**  
シラーズ近郊のペルセポリス(アケメネス朝の祭祀都市：前6～前4世紀)  
イスファハーン「王の広場」とその各種建物、市場など  
同市内(ハーシュ橋などと、アルメニア正教会など。併せて、シラーズのサーデー・ハーフェス墓)も。  
アケメネス朝発祥(前6世紀)のハサルガダエ遺跡とキュロス王墓など  
ササン朝(3～7世紀)のナグシエ・ロスタム遺跡など  
アラムート城址：暗殺教団・H.サッハーフの城塞で、13世紀モンゴル軍により壊滅

**附：最高峰、デマバンド山の自然と登山**  
イランの工芸品など各種 / ほかに、国立博物館展示

ご紹介スライドは、全部で600枚ほどになります。  
(夏のデマバンド山上火口原。)

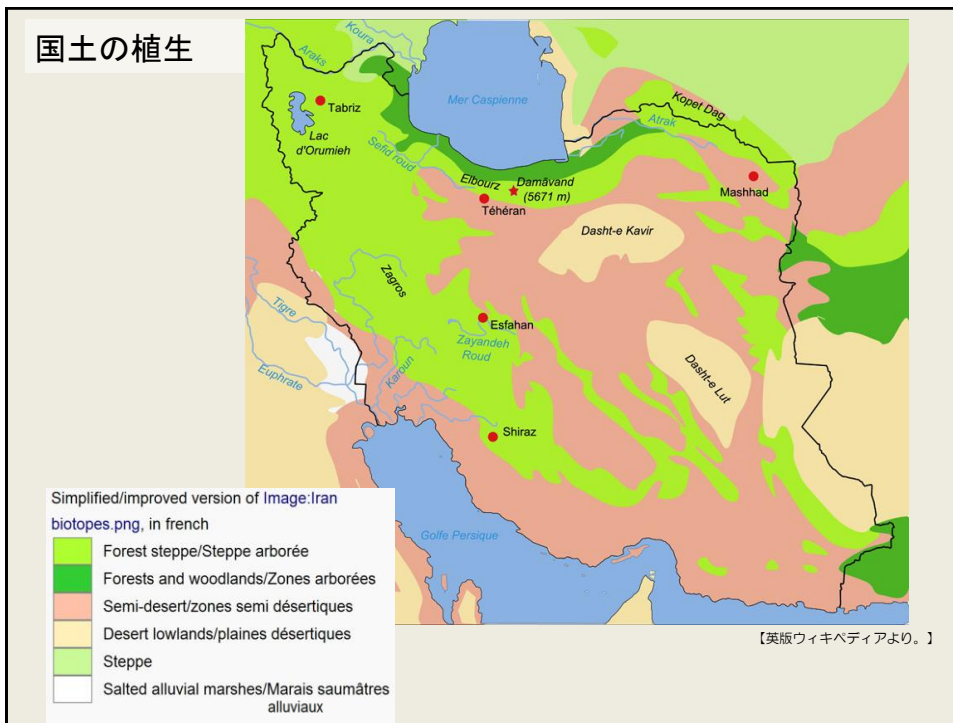
「イラン(ペルシア)の踏査小史とその自然・人々」史料に見る踏査(調査)小史・地政学的位置。  
最高峰デマバンド山の登頂とその自然、遺跡と人々の写真紹介」

### ① ペルシア／イランの地理・歴史概説 — 予備知識として



### その地質的位置





## イランの概要と歴史 – 日本国外務省HPより概略抽出

**面積:** 164万km<sup>2</sup>(日本の約4.4倍)

**人口:** 7,473万人(2010年、イラン政府発表)

**首都:** テヘラン

**民族:** ペルシャ人(他にアゼリ系トルコ人、クルド人、アラブ人等)

**言語:** ペルシャ語、トルコ語、クルド語等

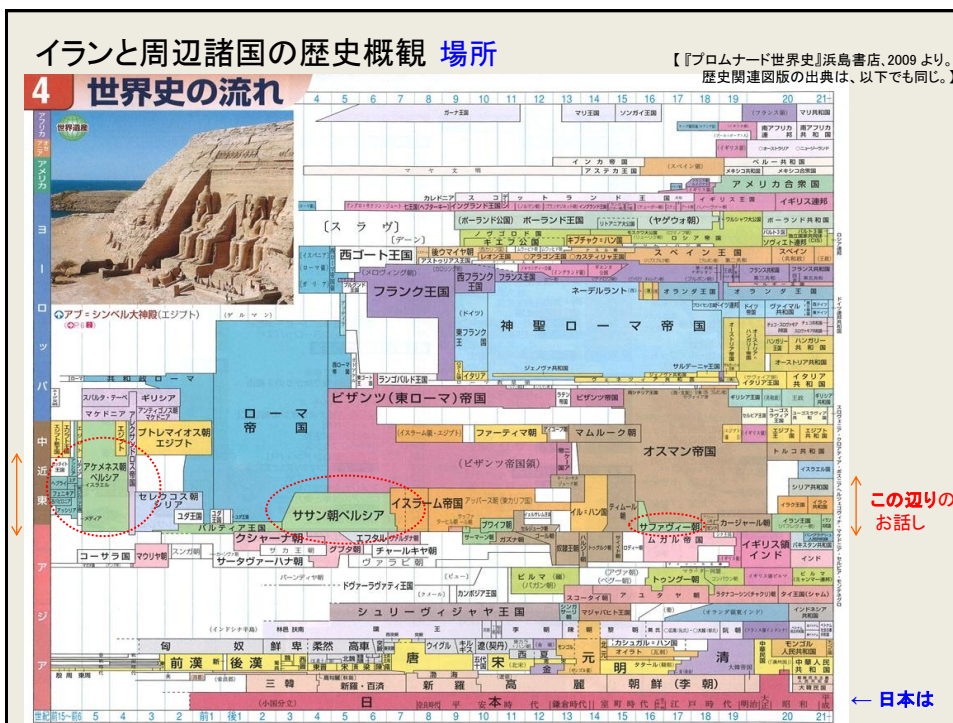
**宗教:** イスラム教(主にシーア派)。ほかにキリスト教、ユダヤ教、ゾロアスター教など

### 歴史:

- ・アケネス朝ペルシャ(前5世紀)、ササン朝ペルシャ(紀元3世紀)時代には大版図を築く。
- ・その後、アラブ、モンゴル、トルコ等の異民族支配を受けつつもペルシャ人としてのアイデンティティーを保持する。
- ・1925年にパフラヴィ(パーレビ)朝が成立。
- ・1979年、ホメイニ師の指導のもと成就したイスラム革命により現体制となる。
- ・イラン・イラク紛争(1980年~1988年)及びホメイニ師逝去(1989年6月)後、
- ・1989年にハメネイ大統領が最高指導者に選出され、ラフサンジャニ政権(2期8年)、ハタミ政権(2期8年)を経て、2005年8月にアフマディネジャード政権が発足。
- ・2009年6月、第10期大統領選挙が実施され、アフマディネジャード大統領が再選。

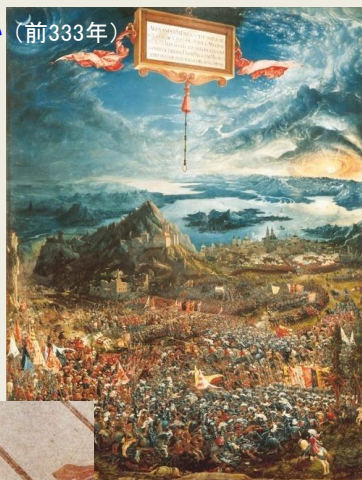
(注: 1979年11月には米大使館人質事件。1981年1月に人質が444日ぶりに解放。)この間、1980年4月には、米軍の救出作戦の失敗など。







### アケメネス朝崩壊への序章 イッソスの戦い (前333年)



前出と同じイッソスの戦いの全体図  
：英版ウィキペディアより

戦いに圧勝したマケドニア王  
アレクサンダーは、東征を続け、  
インダス河に達する。

【ボンベイ遺跡の壁画：英版ウィキペディアより。】

### アレクサンダー大王の遠征経路とそのアレクサンドロス帝国の最大版図



【英版ウィキペディアより。】

遠征帰路でのアレクサンダーの死後、帝国は分裂して、この一帯はセレウコス朝シリアに。  
一方では、ローマ帝国の勃興と繁栄。



古代において、ペルシアの文化が花開くのは、主として、**アケメネス朝とササン朝**

**ササン朝(3世紀初頭～7世紀)の文化は、後のイスラムに多大な影響を与え、  
日本にも渡って、正倉院に。**

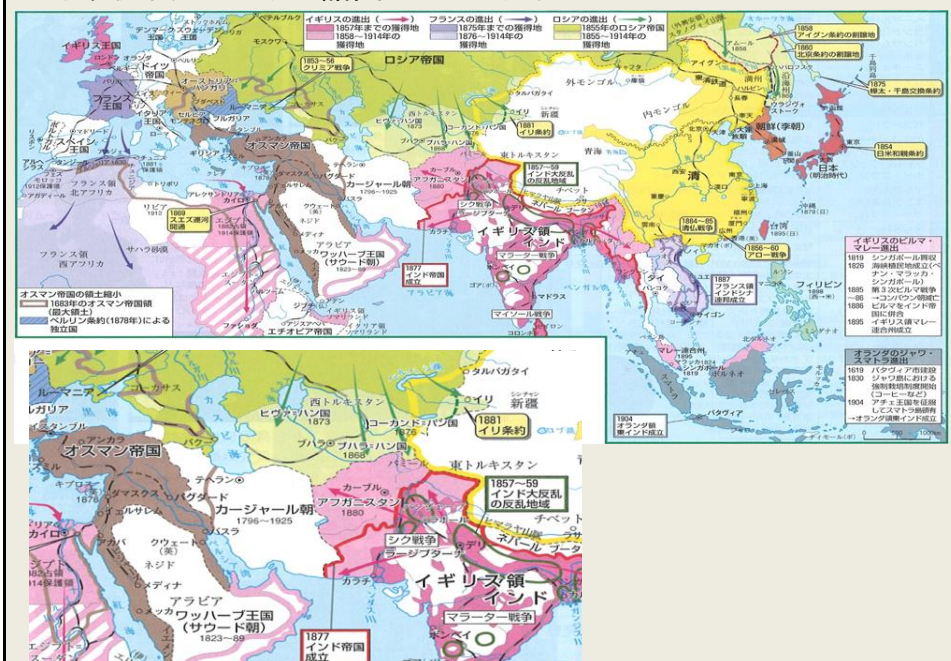


【正倉院御物「白瑠璃碗」:そのHPより】



【イラン国立博物館で  
長岡撮影, 2012.7】

### 19世紀後半、ヨーロッパ諸国のアジア進出





### ご参考: 第二次世界大戦後のアジア





現在の、第3代大統領、アフマディネジャードと  
第2代最高指導者(アヤトラ)、アリー・ハメネイ。



人物肖像は、末尾(後出のヘディンの著作より)を除いて、  
いずれも英版ウィキペディアより。



初代最高指導者、ルーホッラ・ホメイニー



パーレビ朝第2代皇帝(シャー)、モハンマド・レザー・パーレビ



ガジャール朝皇帝、ナスール・エッ・ディン

ご参考：イラン(ペルシア)の文化圏



【ペルシア語版ウィキペディアより。】

ご参考：イランは多民族国家



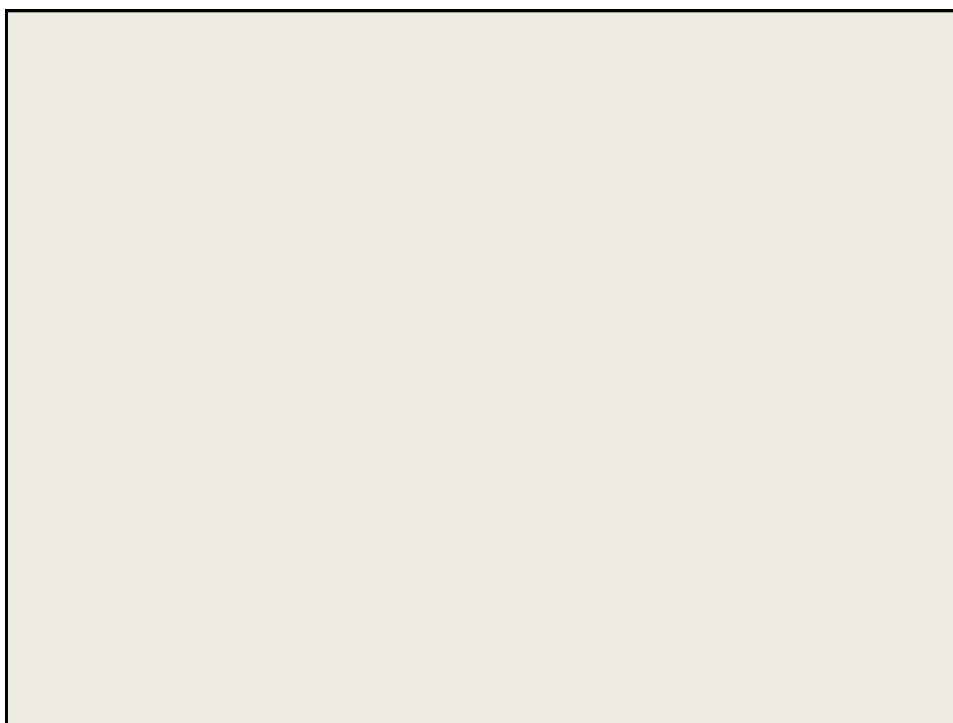
【英版ウィキペディアより。】



ここまで、予備知識としての、ペルシア／イランの 地理・歴史概説

続いては、19世紀～20世紀初頭におけるペルシアと周辺諸国の踏査記録

― 中央アジアの覇権を巡って英露がしのぎ削っていた時代の、  
S. ヘディンらによる報告書に見る当時の状況。



## ② 19世紀～20世紀初頭におけるペルシアと周辺諸国の踏査記録

— 中央アジアの覇権を巡って英露がしのぎ削っていた時代の、  
S. ヘディンらによる報告書に見る 当時の状況。

## スヴェン・ヘディン

Sven Anders Hedin: 1865.2.19～1952.11.26 スウェーデンの地理学者で、中央アジア探検家。  
ストックホルムの中流家庭に生まれた。

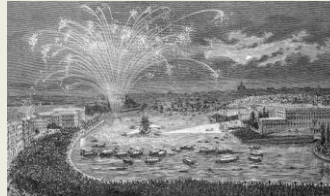
A.E.ノルデンショルドの北東航路探検に感銘を受け、生涯師事した。  
ベルリン大学ではリヒトホーフェンの指導をうけて、中央アジア探検を決意した。

ノーベル族が経営するバクー油田の高級技師家庭の家庭教師に招かれ、  
その帰路に、ペルシア、メソポタミアに旅行(1885～86年)。  
その後、スウェーデン王オスカル2世がペルシアに派遣した使節団の通訳として同行し、  
任務終了後に単独で、メルヴ、ブハラ、サマルカンド、カシュガルなどを旅行(1890～91年)。

その後は、広く中央アジア、チベット、中国を探検して、  
膨大な報告書と地図を残した。  
1908年には、探検旅行の帰途に来日し、東京地学協会での  
講演ほか、大歓迎を受けた。

その間、1902年に貴族に列せられ、1909年には、英国から  
「ナイト」の称号を得る。

第二次大戦後には、国内ではナチス協力者として批判されるが、  
著述に専念して膨大な研究成果を世に出し、1952年にストックホルムで没した。



A.E.ノルデンショルドの北極海での  
越冬(上図)と、その華々しい帰還。

## ご参考: スヴェン・ヘディン、1865-1952 について

スウェーデンの探検家、中央アジア探検の第一人者。

1893年から1908年までの間に、現地人従者とともに3回にわたり広く中央アジアを探検旅行。

第3次探検の帰途、日本を訪問。

その後、1927年から1933年まで西北科学考查団(支那・スウェーデン探検隊)を、

1933年から1935年まで南京政府依頼の新疆自動車探検隊を組織して、

ともに、黄河上流からタリム盆地北東方面に組織的・科学的探検を実施。

晩年はナチスドイツ拾頭下の東欧にあって秘密外交活動。ストックホルムの自宅で長逝、87歳。

以下に、日本訪問の際の講演の最後の部分を、少々長いが転載。

(『測量』2005.10月号掲載の長岡稿からの転載。)

「…予はこの學術的の探検に就ては終始予一人でこれを遂行したのである、別にこれについては助手をつれてあるいたのではない、従って旅行中手の忙しきことは又一通りでなかつた。先づ予は總て予の探検線路の地圖を出来得るだけ精密に作らんと試みたのである、即ち是等の前人未踏の地を踏査しこれを世界に紹介するに付ては、地圖の製作はもつとも肝要なることであると信じたからである、予は探検線路の大部分は平板測量をもつて測圖しつつ進んだ、先づ行程の距離を測るには、あらかじめ二百メートルの直線上を、或は駱駝に乗り或は馬に乗つて行進し、この全距離を進むに幾歩を要せしか、又何秒時を要せしかを測り、幾回かこの方法を繰返して其の平均数を求め、これを常に標準として行程を測りながら歩を進めた。また其の行進線路の方向は磁針によつて一々精細に測りつつ進んだのである、然しながらこれだけでは誤差のあることは冤れない、殊に日を重ぬるに従つて其の差も多ク加つて来るから、予は時々ヶ所に滞在して暗夜に天測を試み、其の頂點の経緯度を精細に測量して圖上の訂正を行ひ、そしてこの行進中には、線路上の地物は勿論その両側にある所のものは、出来得るだけこれを精密に記録することを怠らなかつた、即ち遠方の山であれば其の頂點の方位を一々測定し、或いは湖水であれば其の周囲にある種々の地物を目標としてその形を畫き、また其の水の淡・鹹…(中略)…、一の山についても、其の名梢は處によつて違ふのであるから、各方面の土人に聞き正して其の名稱を記録して置いたのである、また途上に於いて屢々種々の種族の住民に出逢つたが、なるべく彼等と言葉を交へ、其の土地の種々の地名などを聞き正し、また其の風俗・習慣等を知ることには注意した。

以下、次ページへ。

スヴェン・ヘディン、前ページよりの続き。

また山を越える場合等に於ては、一々其の標高を測定した、これはアネロイド気圧計によつたが、猶ほ其の外に沸騰水気圧計・水銀気圧計をも携帯して精密に其高さを計つた、殊にアネロイドは三個程精密なるものを携帯して、常時これを手放すことなく、途上の測定を等閑にしなかつたのである。また峠の頂からは常に出来得る限りパノラマ的展望圖のスケッチを作り、是には主要なる山岳の方位等を一々測定して記入して置いた。此の際一方に於て又寫眞の撮影は必ず行ひつゝ進んだ、予は極めて優良なる機械を携へ、且つ探検上の経験によれば、フィルムは携帯に便利ではあるが、これよりもガラスの乾板の方が常に好結果を得たのである。是等の寫眞の現像も途中至る所に勵行して、帰國の後一編にして現像するが如き繁雜なることを避けたのである。…(中略)…然も諸君が予の講演に向つて清聴せられたのは、予の最も光榮とする所である。また若し青年諸君等の中に本席の講演を聞き、予と志を同してアジア大陸中猶残つて居る他の未發の地方を探検せんとする人が出来たならば、こは予の最も幸福とする次第である(拍手大喝采)」(山崎直方譚述、1909、『地學論叢』4輯)

文中に、当時の探検家の地図作成への真摯な態度が伺われる。  
アジア内奥部についての地図の原資料は、このようにして測量された。



明治41(1908)年、華族会館での小村寿太郎外務大臣主催晩餐会。



左写真: 西本願寺にて大谷光瑞らと。



右: 山崎直方夫人らと。

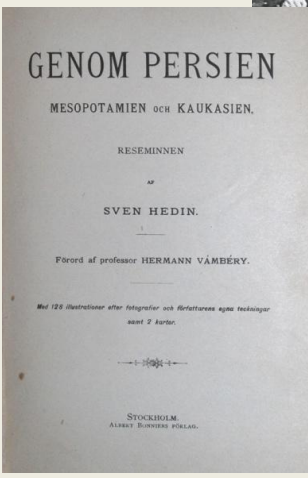
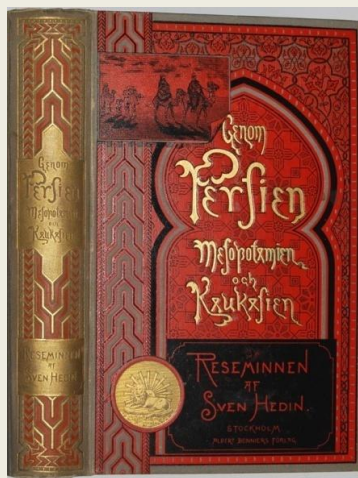
ペルシアにおける S. ヘディンの事績

最初のペルシア旅行は、ノーベル一族が経営するバクー油田(カスピ海西岸)技師の家庭教師として招かれ、半年で仕事を終えて、ペルシア人仲間と、テヘランの南へ旅行。戻って、バクーからトルコ経由で旅行し、帰国。(1885~86年)

紹介は、この調査行についての、ヘディン最初の報告書。フダベストで H.バンベリーに会う。バンベリーがこの前書きを。



この書の冒頭にある  
ナスール・エッ・ディン  
ペルシア皇帝(シャー)  
旅行に便宜を頂いた。



『ペルシア、メソポタミア、コーカサス横断  
旅の思い出』

スヴェン ヘディン  
ヘルマン・バンベリー教授の序文

128図版と地図2葉

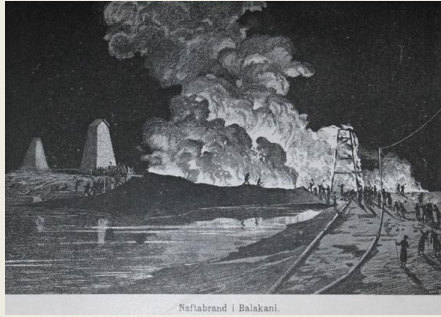
ストックホルム  
(1887年刊)

【ご紹介文献などは、これ以降を含めて、金子民雄さん蒐集のもの。その内容説明も、同様。】

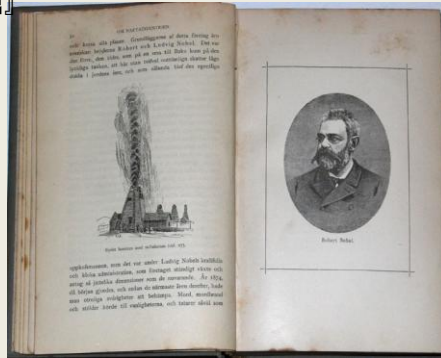
この書の扉(表題紙)より

「イラン(ペルシア)の踏査小史とその自然・人々」史料に見る踏査(調査)小史・地政学的位置  
最高峰デマバンド山の登頂とその自然、遺跡と人々の写真紹介」

『ペルシア、メソポタミア、コーカサス横断一旅の思い出』  
S.ヘディン、1887より、図版の紹介

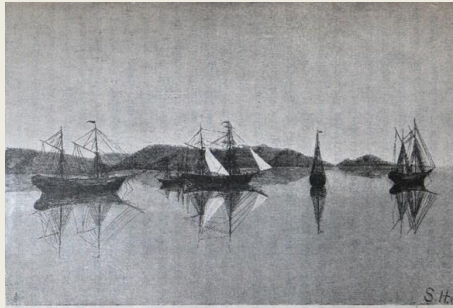


Kafabrand i Bakikani.



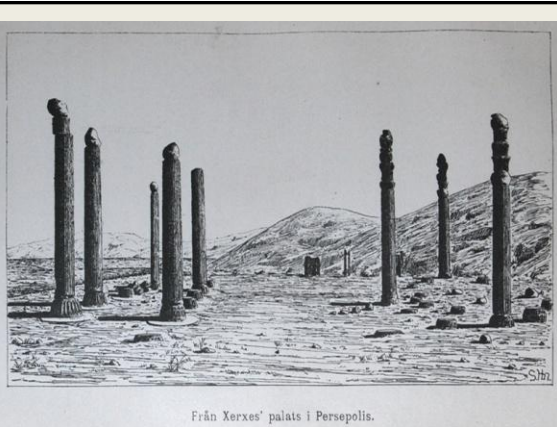
ダイナマイト発明で巨万の富を築いたアルフレッド・ノーベルは、「ノーベル兄弟石油会社」を設立して、バクーで油田開発。  
上は、同書中のロバート・ノーベルと、油井の自噴。

左上:豊富な埋蔵は、自噴とともに火災の原因ともなっていた。



Shahr i Krasnodarska hamn.

カスピ海を隔てた、バクーの対岸クラスノボドスクの港泊地。  
タシケント方面への起点。(現・トルクメンバシ)

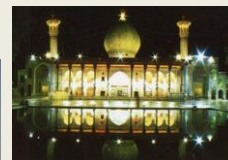


Från Xerxes' palats i Persopolis.

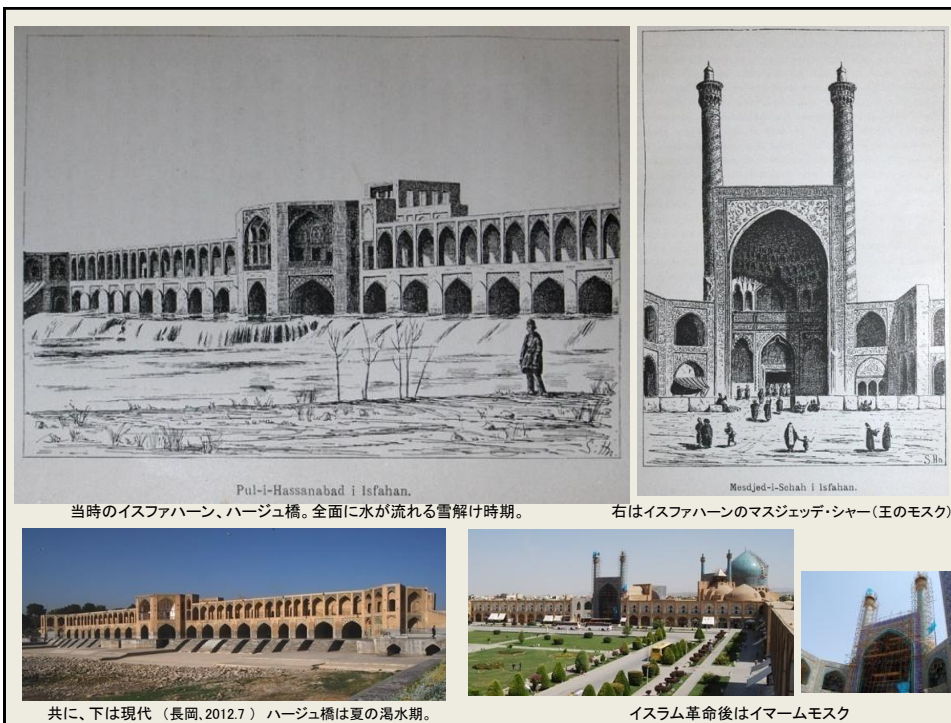
当時の、列柱が少し残っていたペルセポリス遺跡  
下は、現代 (長岡、2012.7)

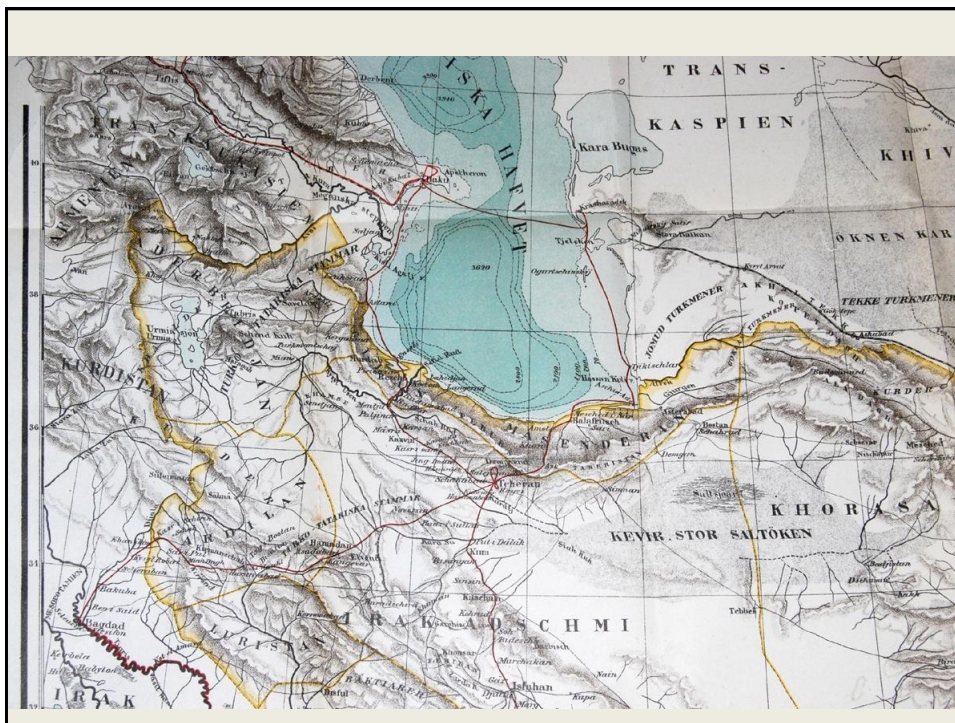


Sejd Mir Achmeds graf.



セイド・アフメド(シャー・チェラーグ)廟  
下は、その現代  
(シラーズ・ホマ・ホテルのハンフより)







ペルシア湾に面したブシェールの港(現在は、原発立地で知られる。)

右上:ヨーロッパに続くイスタンブールのガラタ橋。

下は、ヘディンによる「トルコの夫人」スケッチ。  
その後の著作にも、人物スケッチが多く載せられる。

Förnäm turkisk dam.



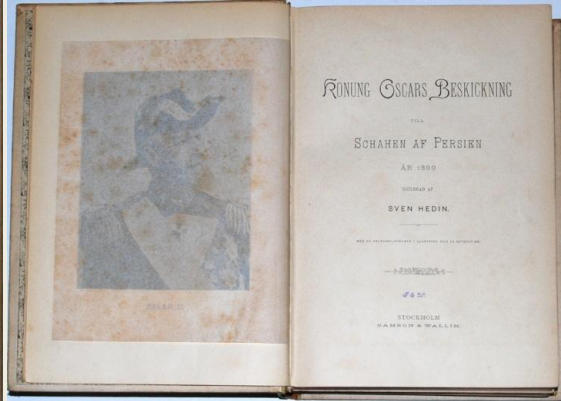
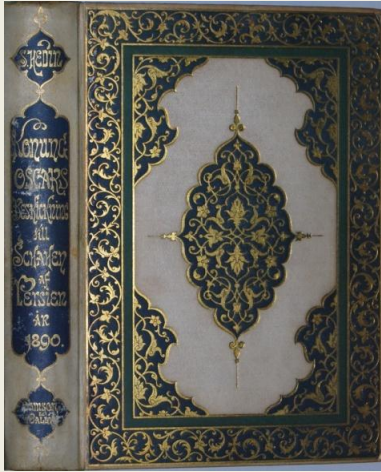
『テヘランからカシュガルへ』S.ヘディン、1891  
スウェーデン王オスカル2世がペルシアに派遣した使節団の  
随員(通訳)として訪問。任務の後、単独で、メルヴ、ブハラ、  
サマルカンド、カシュガルなどを旅行(1890-91年)。  
後の報告書の予報的内容。  
ベルリン大学(リヒフォーン教授)留学の後、ハレ大学での学位  
論文のもとになったのが、左の論文。(金子民雄さんによる。)

下:ヘディンの博士論文『デマバンド』  
ペルシア訪問で皇帝の知遇を得、勧めによって、  
デマバンド山へ。それを契機としてまとめたもの。

『1890年、オスカー国王よりペルシア皇帝への公使派遣』S.ヘディン、1890

ヘディンによる使節団の報告書。

内容は、使節団のことのみで、そのあとのヘディンの旅についての記述はない。この本は、スウェーデン語のみで、ほかの多くのように、ドイツ語版はない。



見開きの左に、スウェーデン国王の写真  
(次スライドに。)



OSCAR II.

スウェーデン国王 オスカー二世

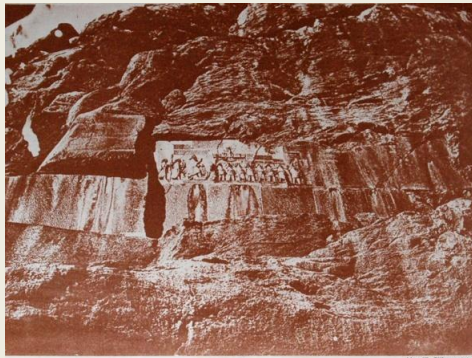


Nasr-ed-Din, schah af Persien.

ペルシア皇帝(シャー) ナスール・エッ・ディン

「イラン(ペルシア)の踏査小史とその自然・人々」史料に見る踏査(調査)小史・地政学的位置、  
最高峰デマバンド山の登頂とその自然、遺跡と人々の写真紹介」

### 同書より、図版の紹介



Darius och hans nio upproriska vasaller.  
Relief vid Bisoutan.

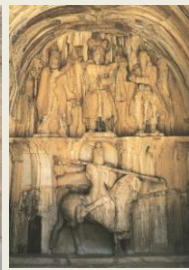
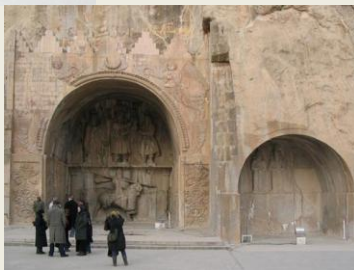


Konung Schapur, relief i Tag-i-Bostan.



現代のダリウスー世戦勝記念碑(ペルシア語版ウィキペディアより)

上右の、現代の姿(英版ウィキペディアより)  
イラン西部ケルマンシャー近郊の、ササン朝  
ターケイ・ブスタン(Taqi-Bustan)遺蹟。  
ホスロー2世が、両側の神々から王権を授与  
される様子を描く。



Teherans östra stadsdel.

当時のテヘラン。

現代の緑豊かなテヘラン  
公園など、緑豊かな地区も。





当時の、テヘランの商店街での人々。

下は、現在のテヘランでの普通の商店街と、昔からの市場(バザール)。



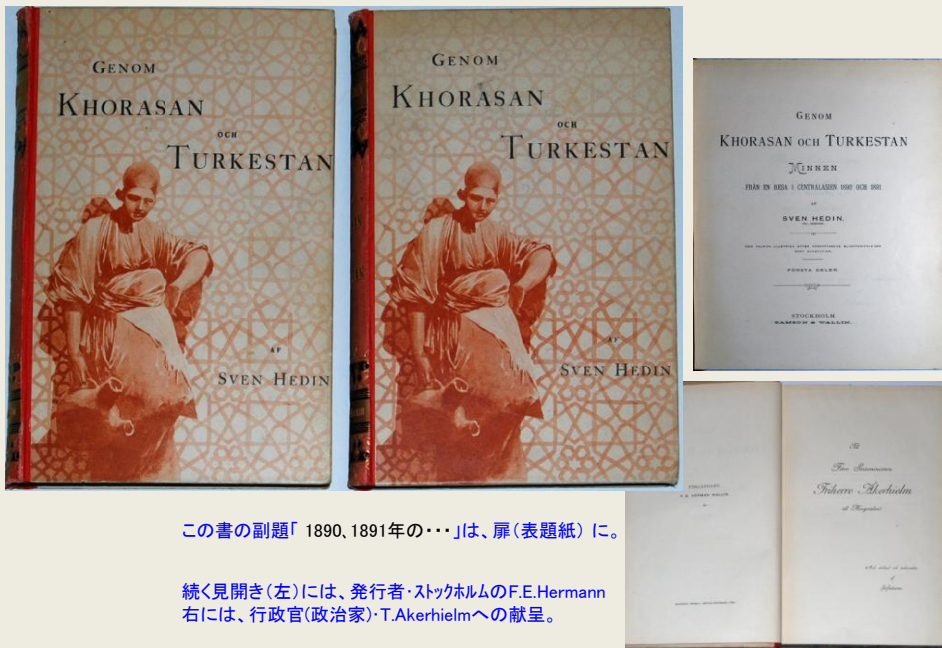
Demavend.

左:ヘディンが見たデマバンド山と、その現在の姿(上)  
(前述:ヘディンの博士論文の対象地)

右: 拝火教徒の「鳥葬の場」。1930年代の禁止まで使われた。  
下は、その現在。(『地球の歩き方 イラン ペルシアの旅』2011 より。)

Stilhetens torn, gubernas begravningsplats vid Teheran.

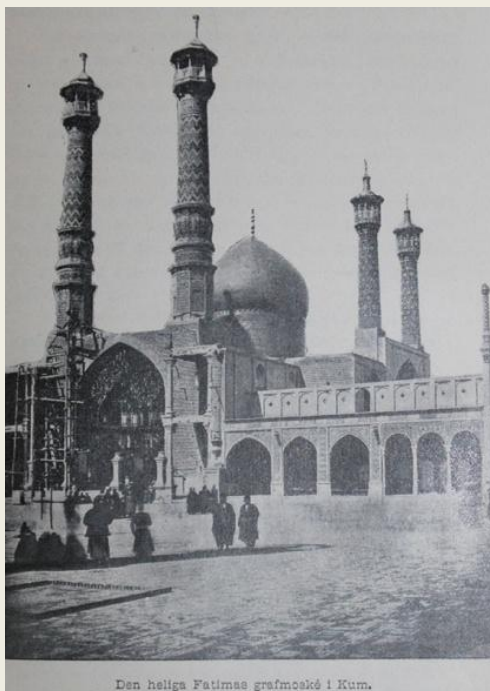
『ホラスンからトルキスタンへの旅—1890、1891年の中央アジア旅行の思い出(回想)—』  
S.ヘディン、1890・1891年刊(2巻のため)



左: コムのFatima Masumeh Shrine  
12イマーム派第8代イマーム・レザーの妹、ファーティマの廟  
(シーア派の聖地)



その現在。(英版『イキペディア』より)

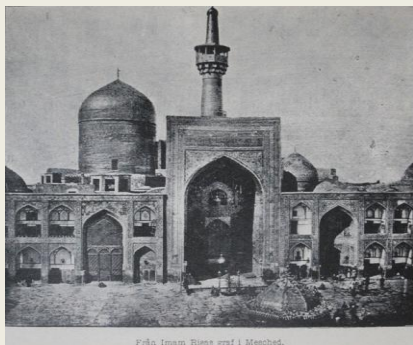


Den heliga Fatimas grafmoské i Kum.

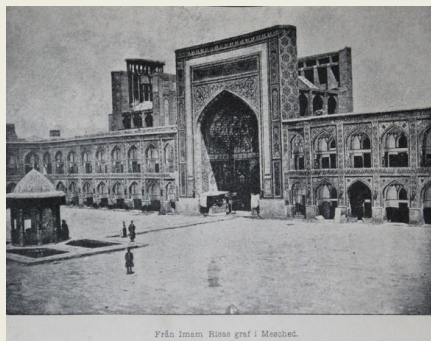
マシュハド(メシェッド)のモスクなど



Imam Riza grolschik i Mesched.

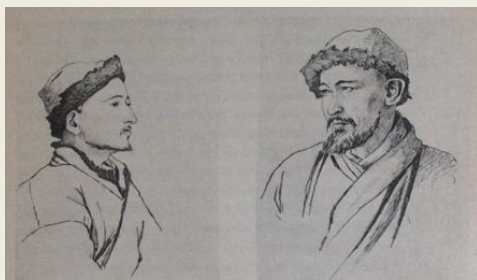


Folka Imam Riza graf i Mesched.



Prin Imam Riza graf i Mesched.

ヘディンの著作には、その初期から、人物画スケッチが多く登場



Kadern Khan, sart (Kaschgari).

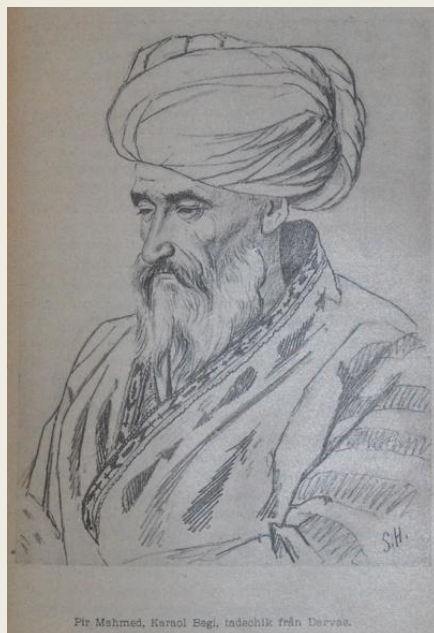
Tair Aobun, sart (Kaschgari).



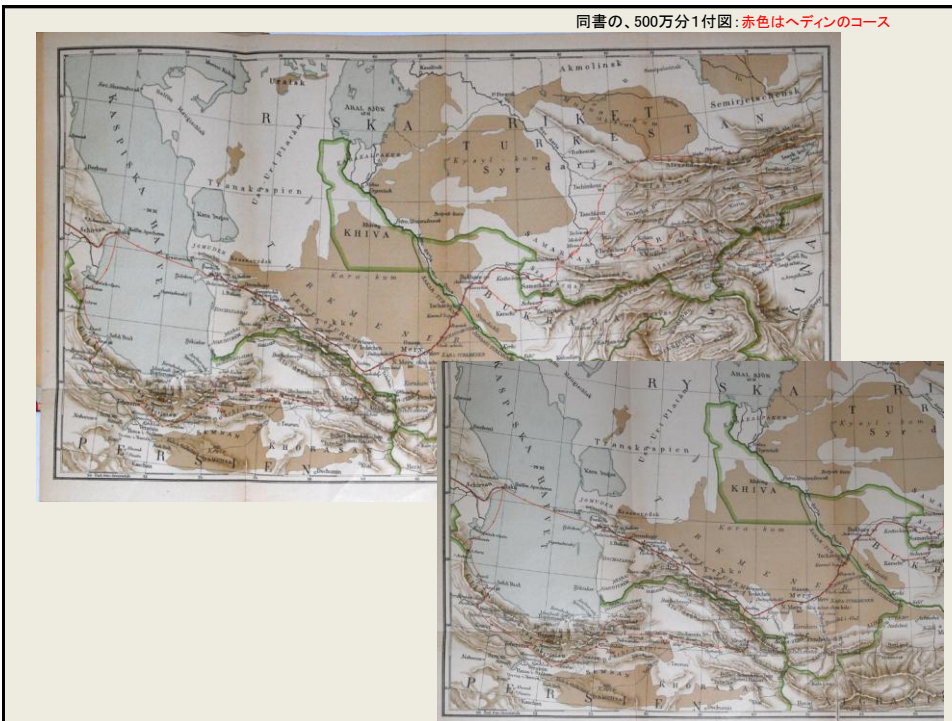
Muhammed Kerim, sart, aksakal i At Saaschi.



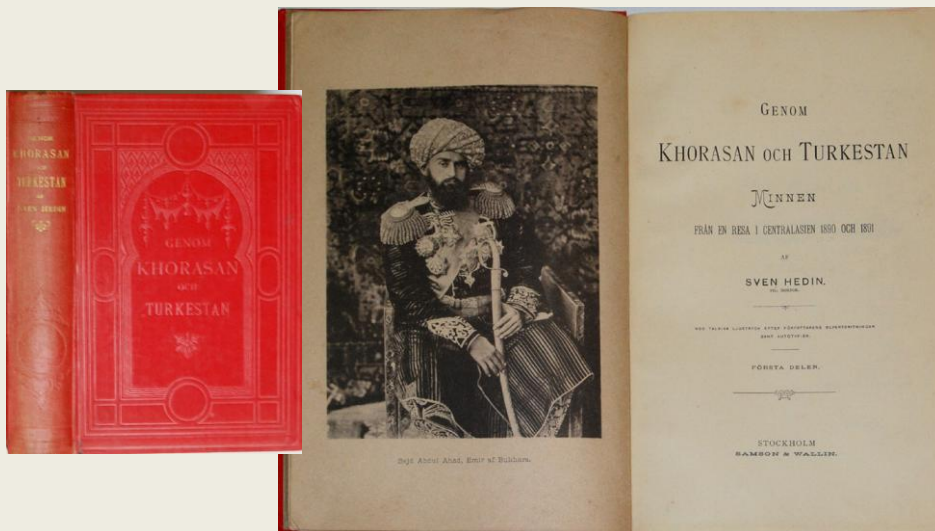
Sartik dirvash eller dervisch i Tschiraktschi (Bukhara).



Pir Mehmed, Karacol Begi, tadachik fran Darysa.



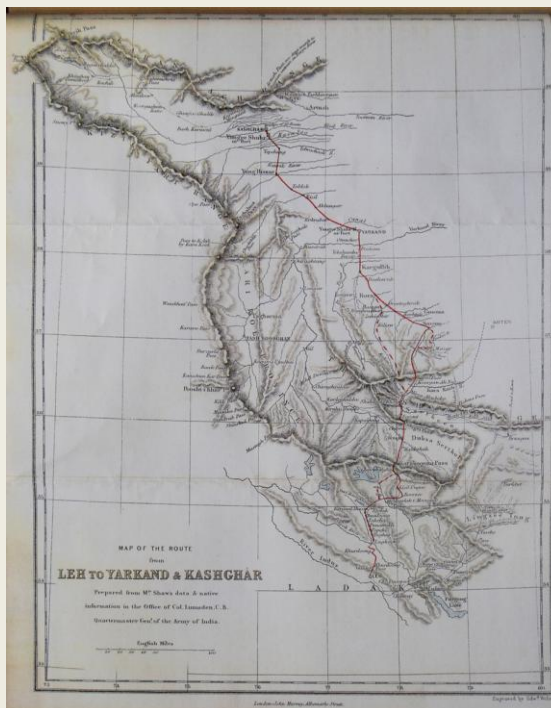
『ホラサンからトルキスタンへの旅—1890、1891年の中央アジア旅行の思い出(回想)—』  
S.ヘディン、1892年刊 — 同名の、1890・91年刊の2巻本を1冊にまとめたもの



左は、ブハラのエミール(藩王)、  
アブドゥル・アハッド

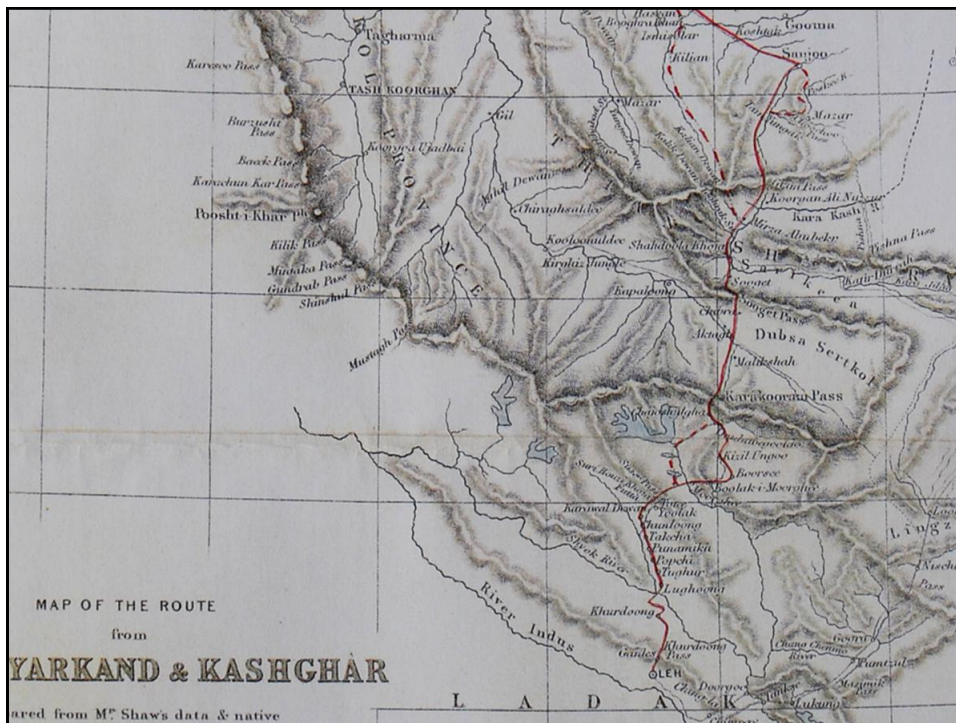
同書の附図  
「レー から ヤルクンド、カシュガルへの  
ルートマップ」: 基図はインド陸軍

カルドン・ラ と カラコルム 峠を越える  
ルートが示されている。



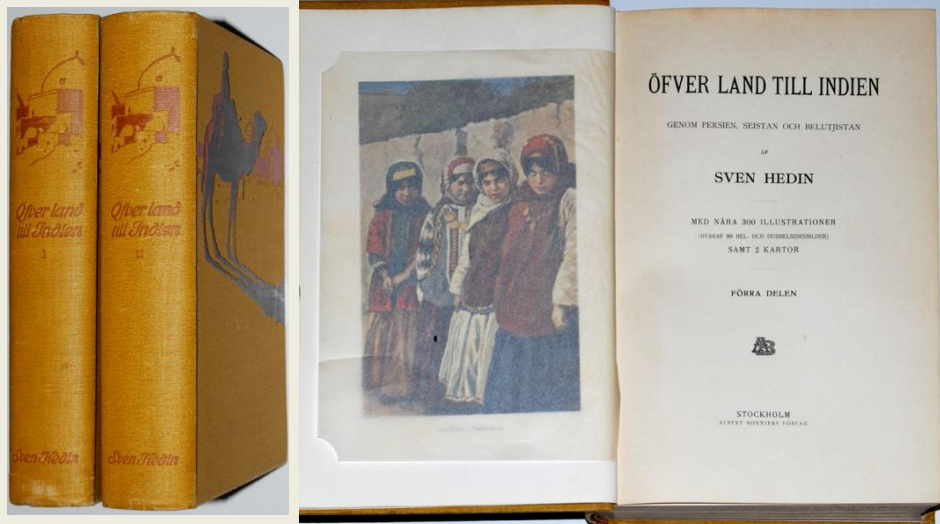
次ページで図の下半部の拡大を。

「イラン(ペルシア)の踏査小史とその自然・人々」史料に見る踏査(調査)小史・地政学的位置。  
最高峰デマバンド山の登頂とその自然、遺跡と人々の写真紹介」



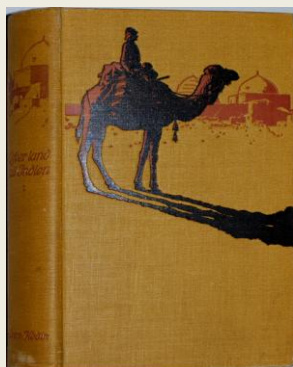
『陸路インドへペルシア、セイスタン、バルチスタンを通りてー』S.ヘディン、1910年刊  
ヘディンによる、3次探検(1906-08)の報告書

下は、第1巻の見開き

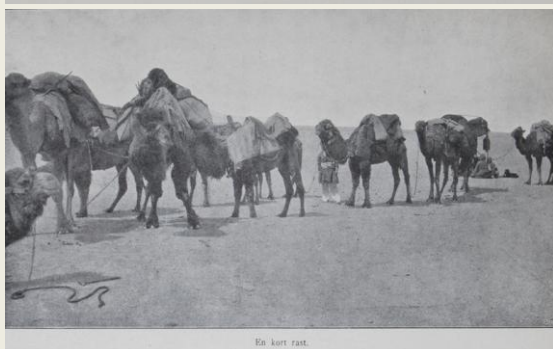


1905年 ストックホルムを出発。ーその年の秋に日露戦争は終わる。  
旅は、ヨーロッパ(トルコ)～黒海～テヘラン(こゝらで1906年)～砂漠地帯(これはマルコ・ポーロのルート)～ペルシアの南～アフガンの南の端～インドへ～北へ。

以下、第1巻所載の図版を紹介。



Ett rastställe på armeniska höglandet.



En kort rast.



Mirza Aslan,  
den år 1909 utvalde Schakir af Persien.



En persisk skönd,  
Fotografen är tagen af en armenier i Teheran.



Kurdiska barn.

ペルシア人の若い女性

クルドの人たち

当時の女性の服装: 現代(下写真)とは違う。



婦人服装

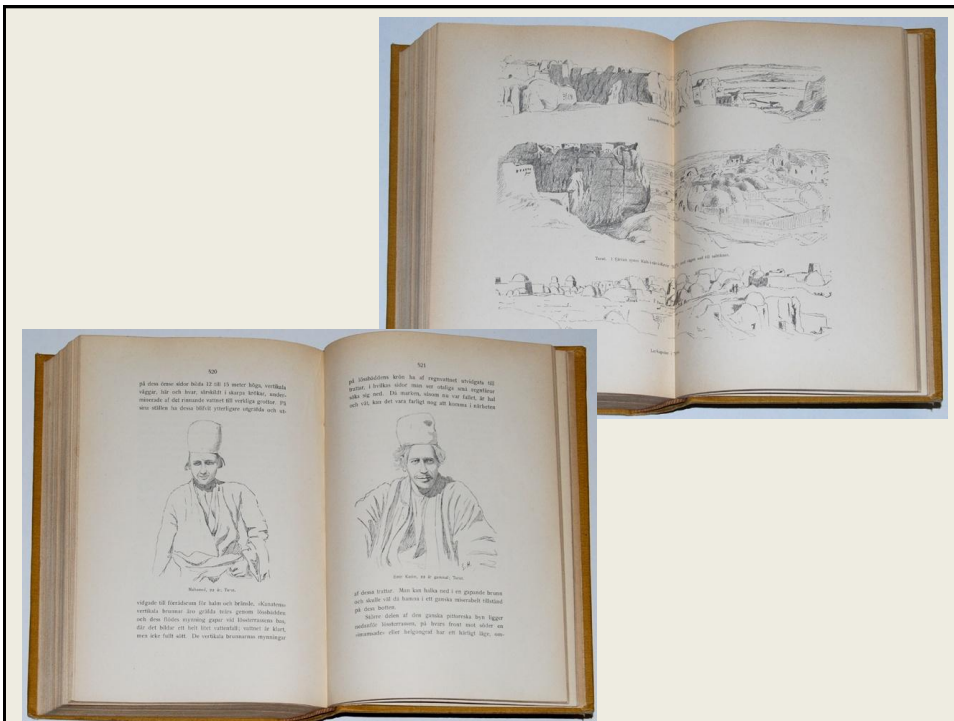
参謀本部派遣の工兵中佐・古川宣譽が  
スケッチしたペルシア婦人(明治24(1841)年)

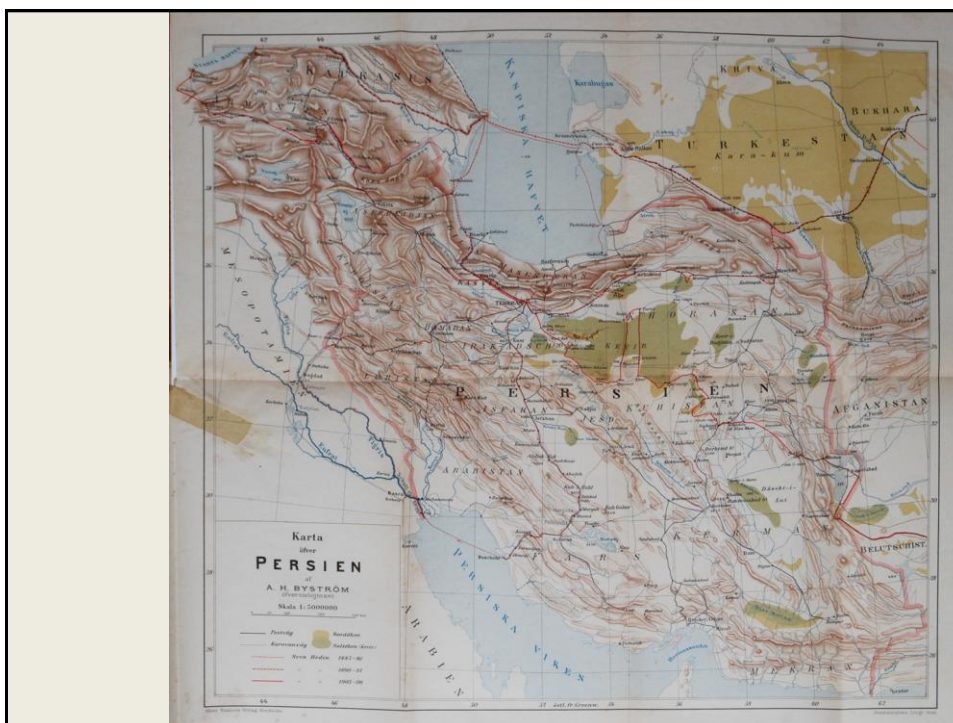


Damer i promenaddräkt.  
Fotografen är tagen af en armenier i Teheran.

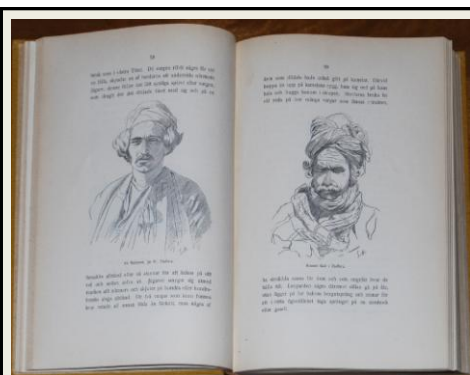
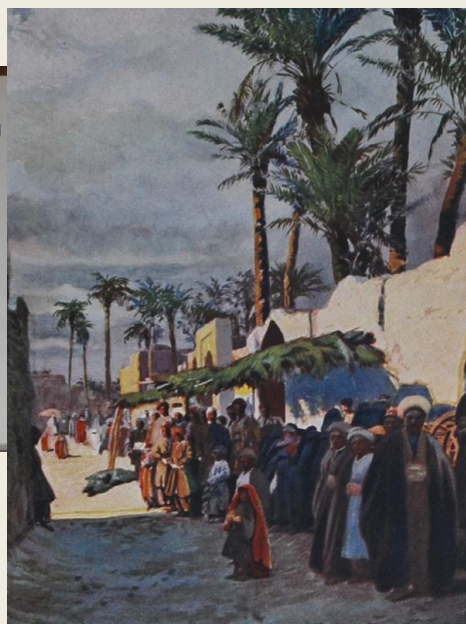
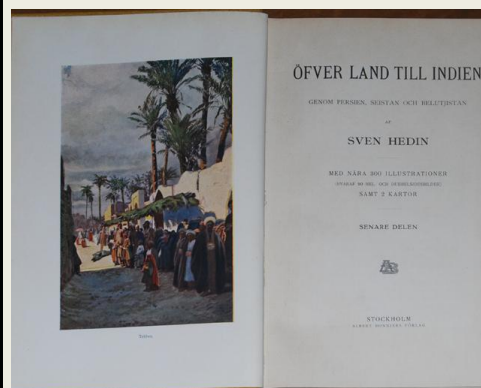


En karengård i Teheran.

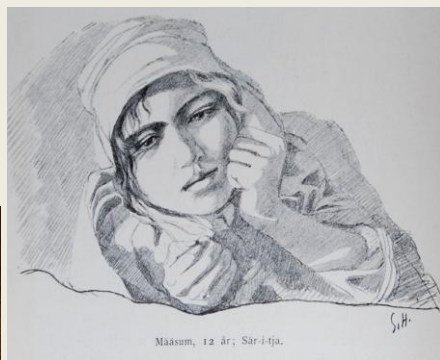




続いて、第2巻所載の図版を。

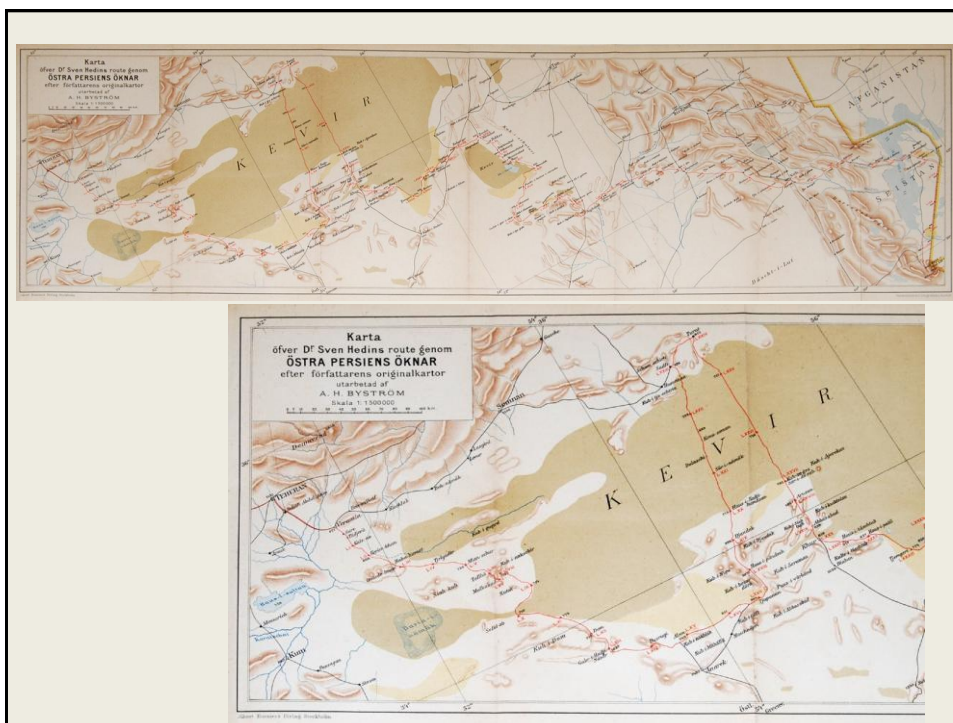


この書でも同様に、多くの人物画スケッチが



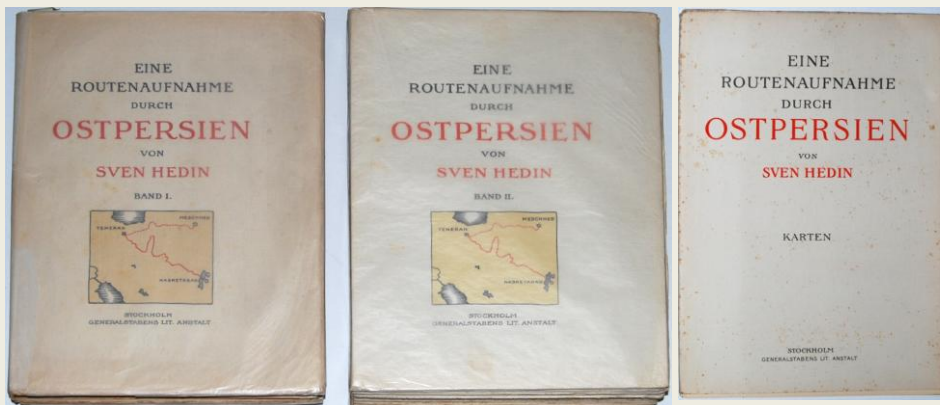
Määsum, 12 år; Sär-i-tja.



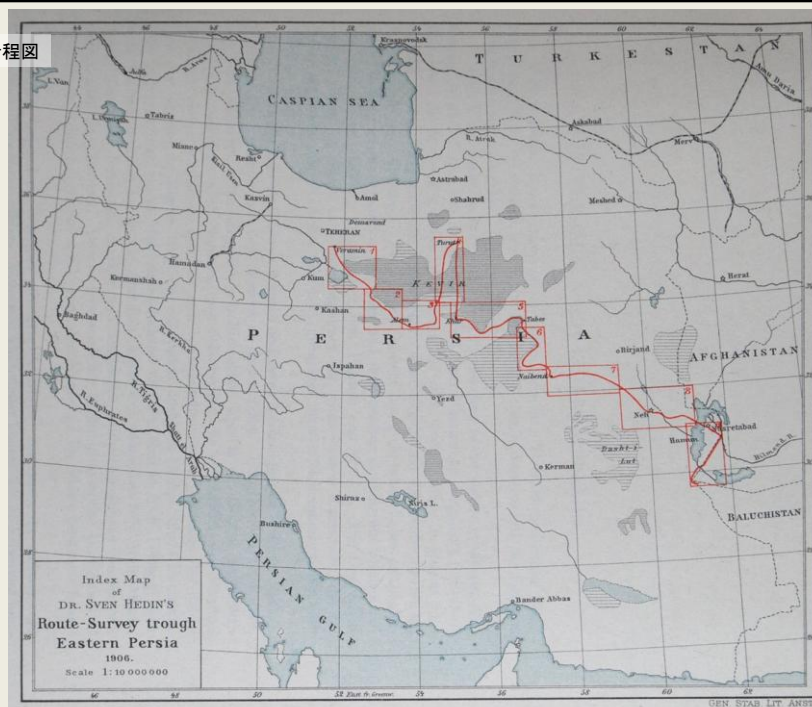


『東ペルシアの路線測量』S.ヘディン、1918・1927年刊:本文2巻と地図1冊(右)

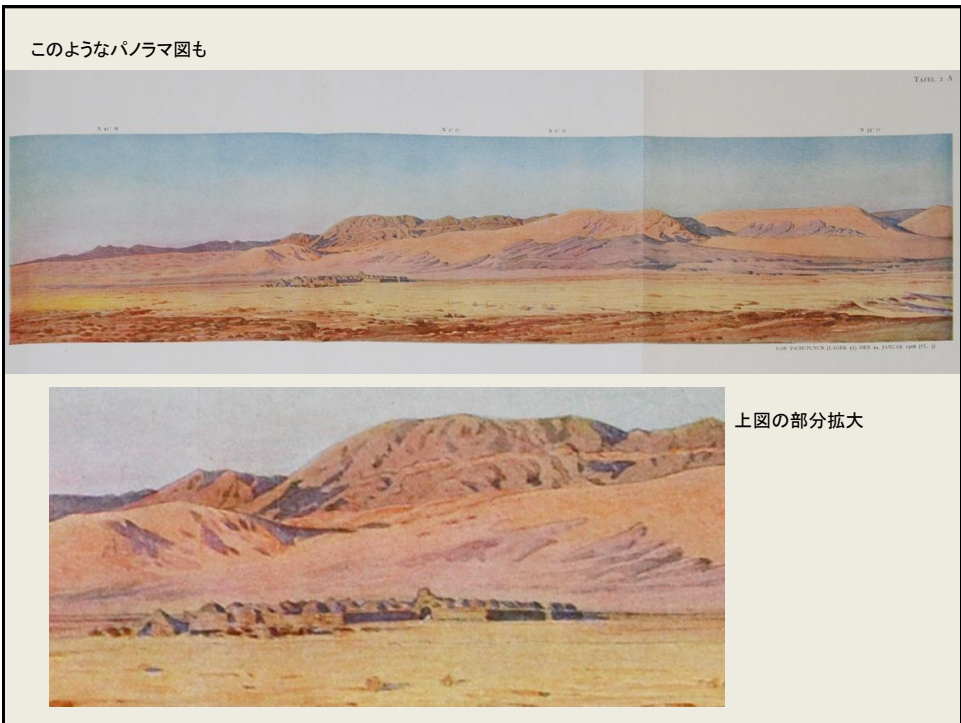
地図に刊行年の記述はないが、たぶん、1927年(Band II)との同時出版。



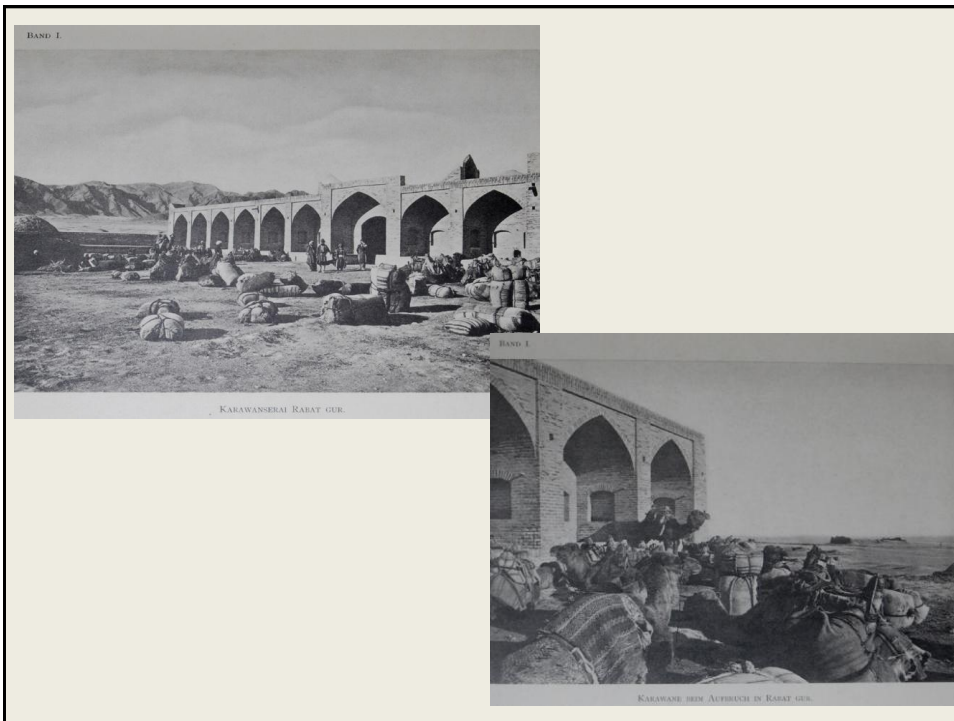
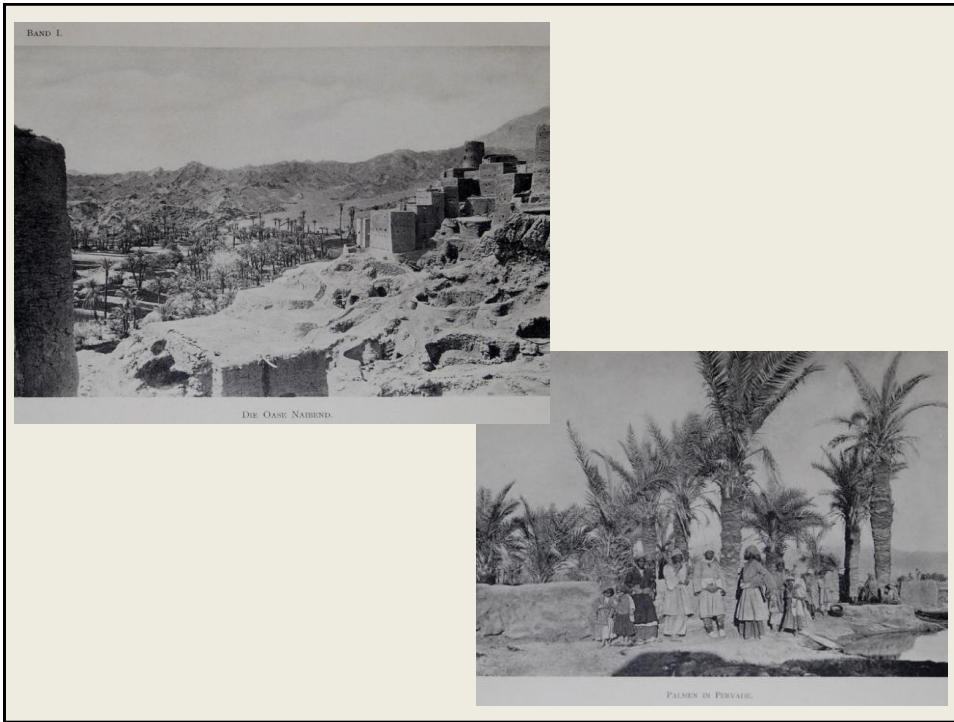
調査の行程図



「イラン(ペルシア)の踏査小史とその自然・人々」史料に見る踏査(調査)小史・地政学的位置。  
最高峰デマバンド山の登頂とその自然、遺跡と人々の写真紹介」





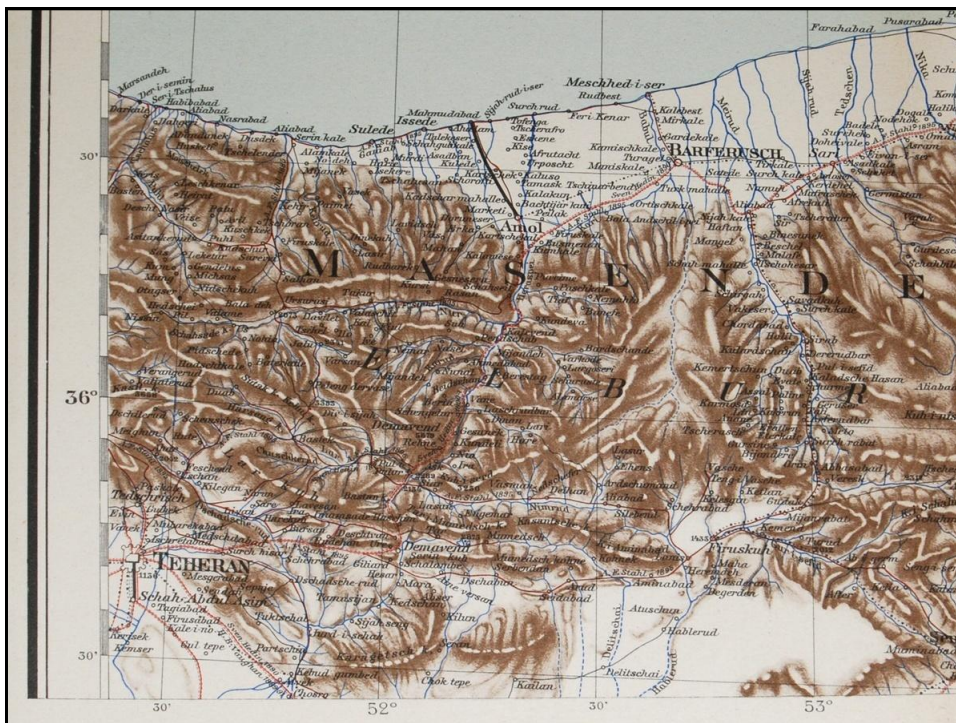


3巻のうち「地図集」の内容 - 8枚組の100万図から、その左上を構成する1枚を。



その左下図に  
付された凡例

次ページに、テヘラン周辺の部分拡大を。

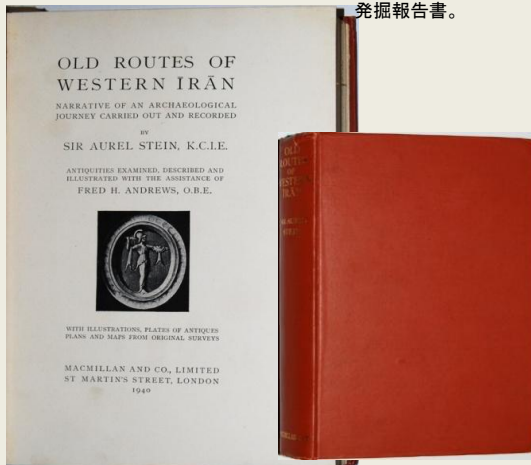


### ペルシアにおける A. スタインの事績

サー・オーレルスタイン, 1862-1943

英国(ハンガリー生まれ)の考古学者で探検家。  
1900年から1916年まで、3回にわたり主にタリム盆地周辺の探検旅行と考古学的発掘。敦煌莫高窟から膨大な経典類を将来したことで有名。他の探検家とは違って、インド測量局の優秀な技師を同行したので、詳しい地図を作成できた。  
後年は西アジアを研究対象とする。カーブルに客死、82歳。

『西イランの古道』A.スタイン、1940年刊 十字軍時代の遺跡の発掘報告書。



金子さんコメント：ペルシア、近東に関するスタインの本は合計3冊あり、これは第1号。第3号は、戦後、未定稿のものとして出版された。

TO  
SIR EDWARD D. MACLAGAN  
K.C.S.I., K.C.I.E.  
LATE GOVERNOR OF THE PUNJAB  
  
THE FRIEND WHOSE SYMPATHY AND HELP  
ENCOURAGED AND FURTHERED MY EFFORTS  
FROM THE START OF MY INDIAN CAREER  
THIS RECORD OF EXPLORATORY TRAVEL  
IS INSCRIBED  
IN GRATEFUL AFFECTION

上は、同書にある献呈の辞

以下は、金子民雄さん訳による。

私のインドにおける人生の出発点は、私の努力をカづけ、進めて下さり、同情と援助を惜しまれなかった

前・パンジャブ総督  
エドワード D. マクラガン卿  
K.C.S.I., K.C.I.E. に

この冒険的旅行記を、心からなる感謝の気持ちをもつて謹呈いたします。

金子さんコメント：

スタインは英国人ではなかったので、英文の表現が大変むずかしくて(複雑)、訳にくいのです。



1. MOUND OF TUL-I-GIRD, ARDAKĀN, SEEN FROM SOUTH-WEST



25. RUINED MANSION, QAL'A-I-AULISH, TĀSHĀN

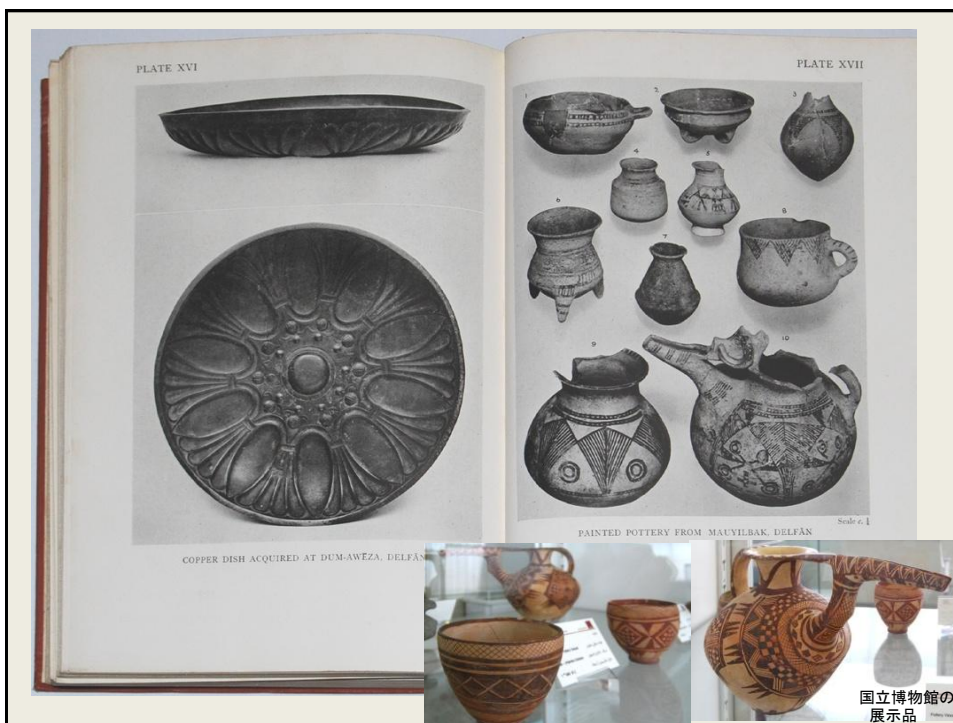


2. ARDAKĀN TOWN, SEEN FROM NORTH-EAST

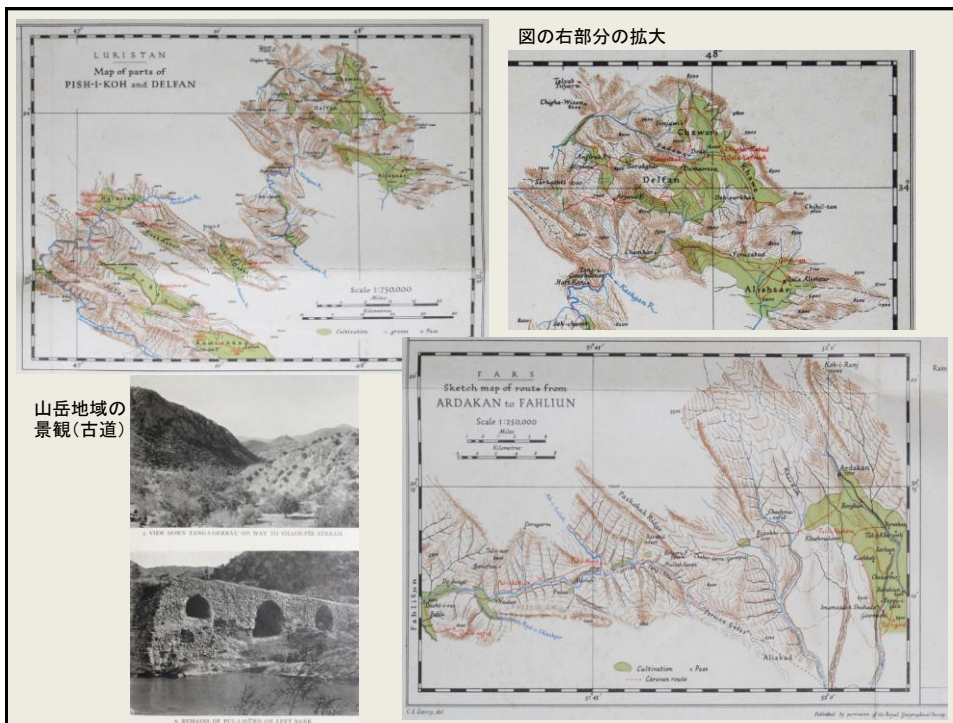
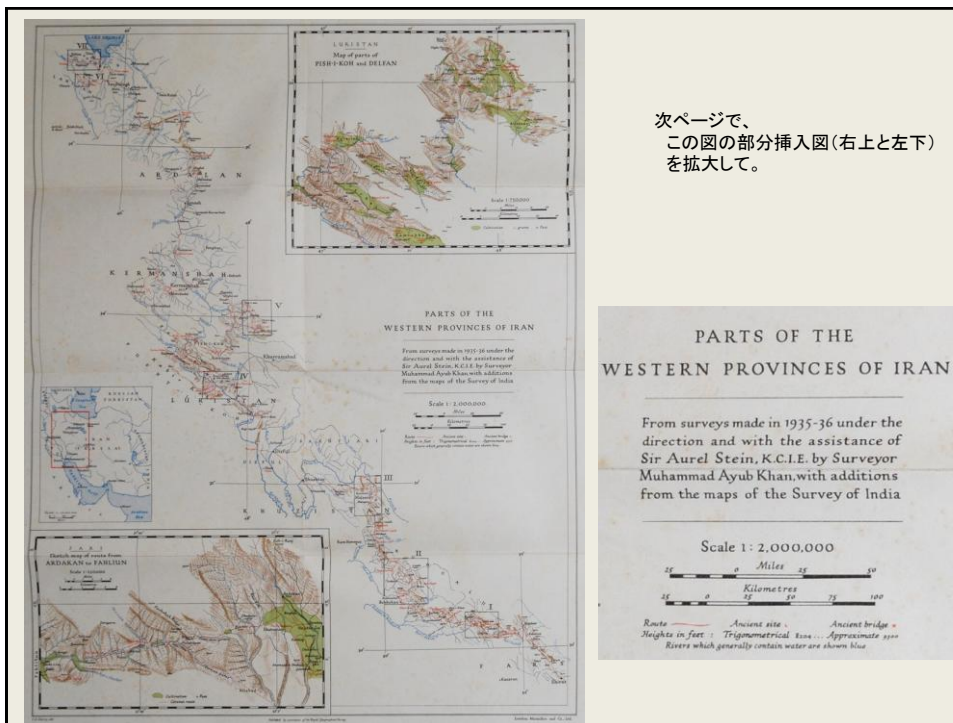


26. INTERIOR OF RUINED HOUSE AT AULISH, TĀSHĀN

スタインによる発掘品の数々



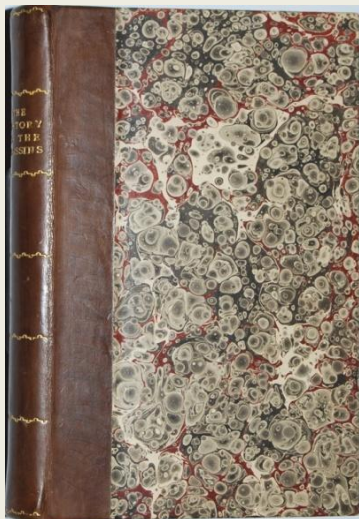
「イラン(ペルシア)の踏査小史とその自然・人々」史料に見る踏査(調査)小史・地政学的位置。  
最高峰デマバンド山の登頂とその自然、遺跡と人々の写真紹介」



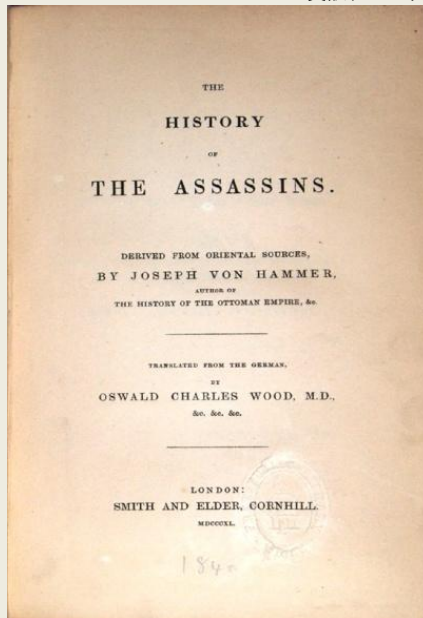
参考ご紹介

『暗殺者教団の歴史—東洋の伝承』 Joseph von hammer、1818年刊：

Oswald Charles Wood 英訳、1840年刊



金子さんコメント：珍しい本。綺麗な装丁だが、初版本は多分、仮とじ本であった。

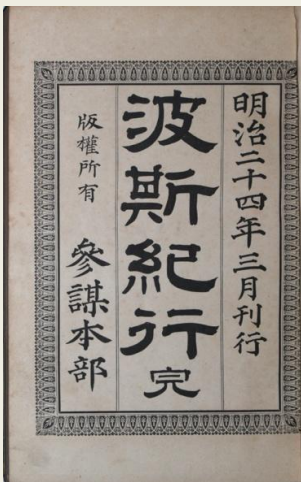
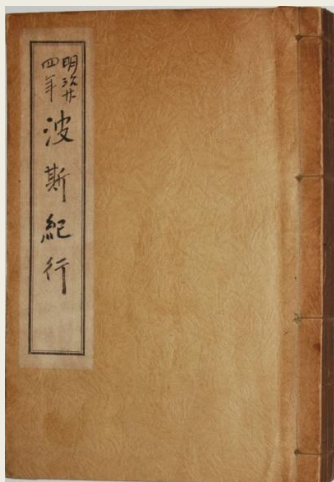


以下は、ペルシアにおける 日本陸軍の情報収集活動など：

明治前期の軍は広範な情報収集

『明治廿四年 波斯紀行 完』 参謀本部、明治24(1891)年3月刊行

稀覯本のため、広くは読まれていない。  
内容はすぐれている。

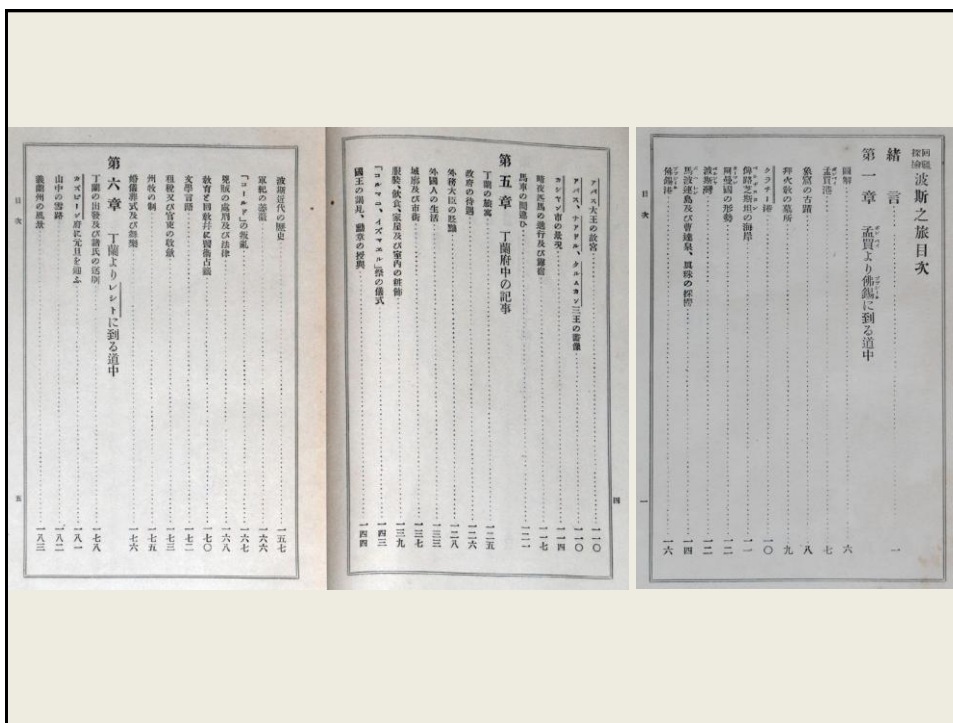
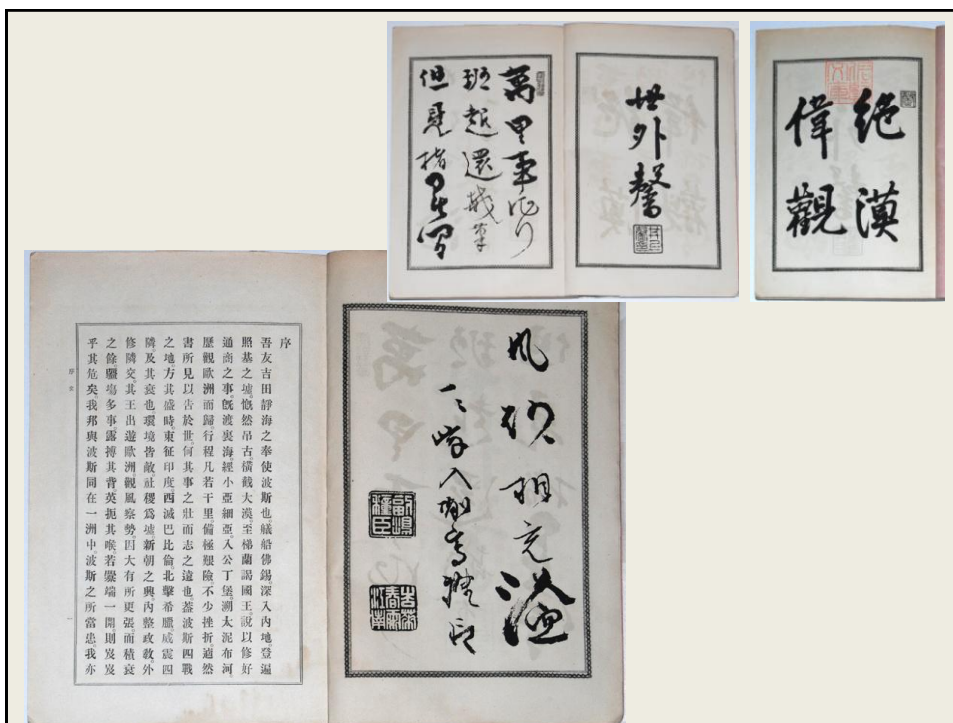


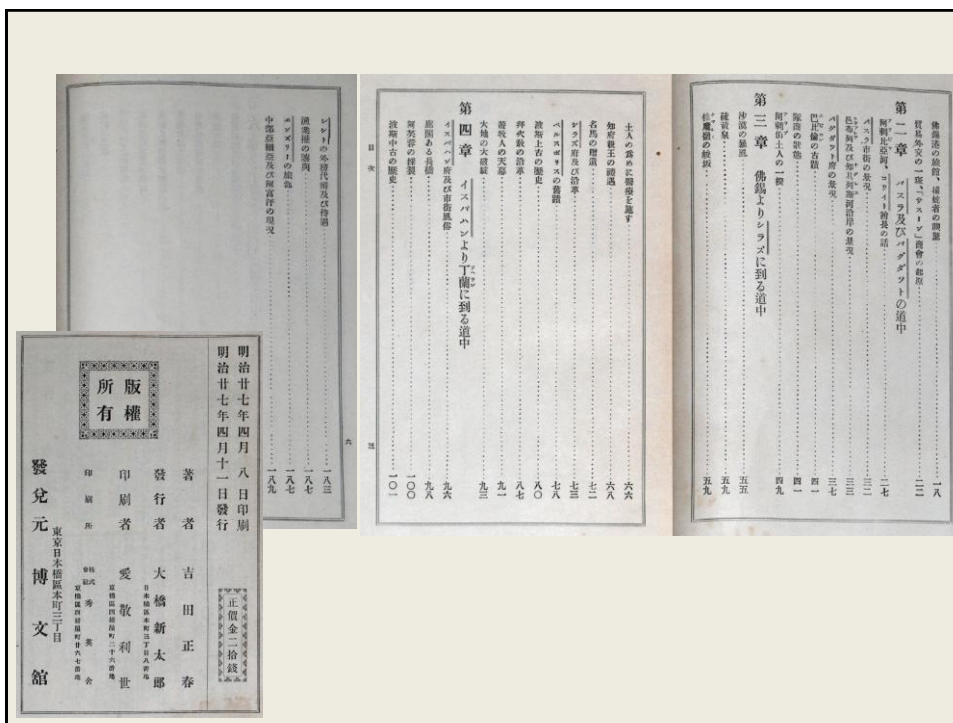
参謀本部からペルシア(波斯)への初の派遣者、陸軍工兵中佐・古川宣譽の報告書。



同書の挿絵より



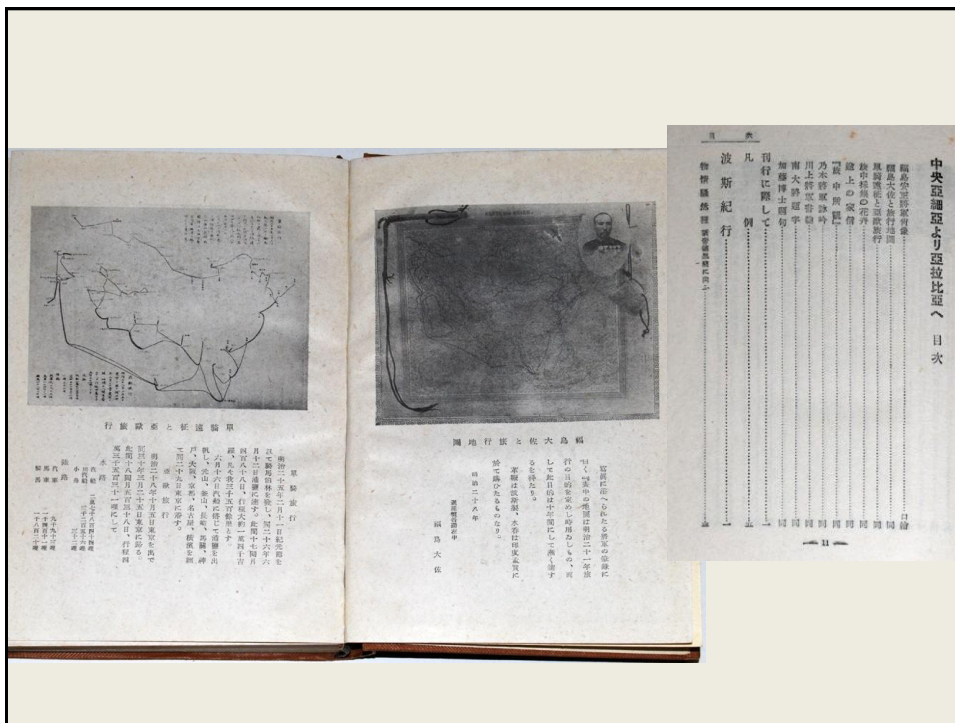




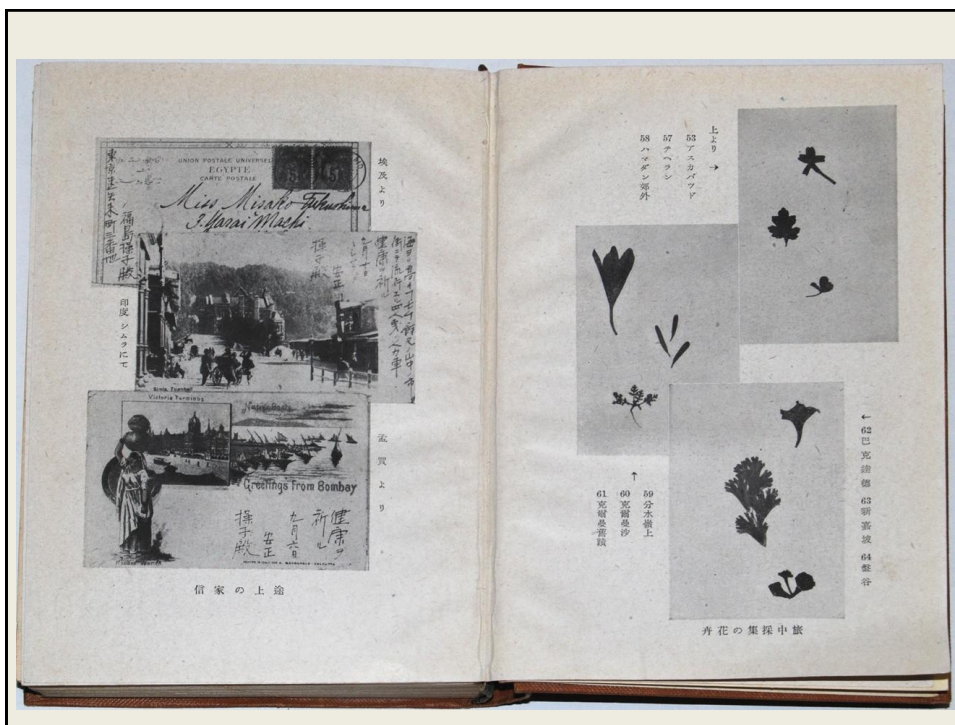
『中央亜細亞より亜拉比亞へ(福島將軍遺蹟續)』福島安正(遺稿)、昭和18(1943)年刊



明治25(1892)年の「シベリア単騎横断」で名を馳せた福島安正將軍の遺稿をまとめたもの。  
 参謀本部の報告だったので、元本の完全稿本がない。これは、ほんの一部が発見されたもので、元本は不明。  
 (金子民雄さんによる。)

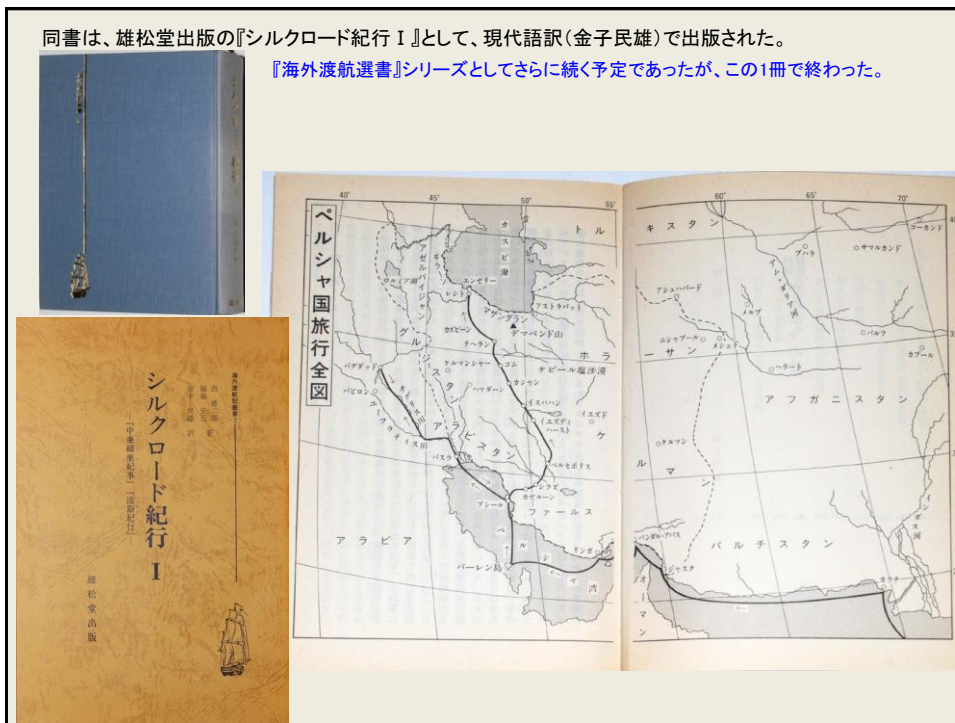


「イラン(ペルシア)の踏査小史とその自然・人々」史料に見る踏査(調査)小史・地政学的位置、  
最高峰デマバンド山の登頂とその自然、遺跡と人々の写真紹介」

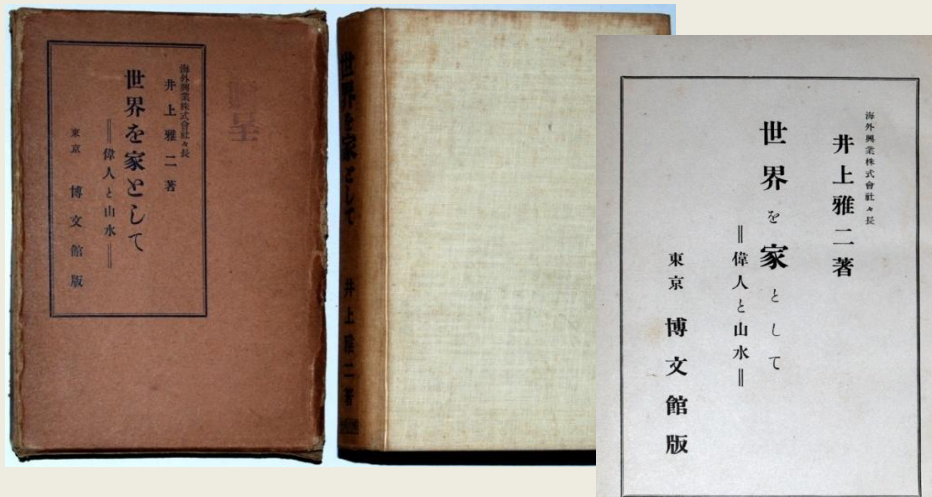


同書は、雄松堂出版の『シルクロード紀行 I』として、現代語訳(金子民雄)で出版された。

『海外渡航選書』シリーズとしてさらに続く予定であったが、この1冊で終わった。



『世界を家として—偉人と山水』井上雅二、東京博文館、昭和4(1929)年

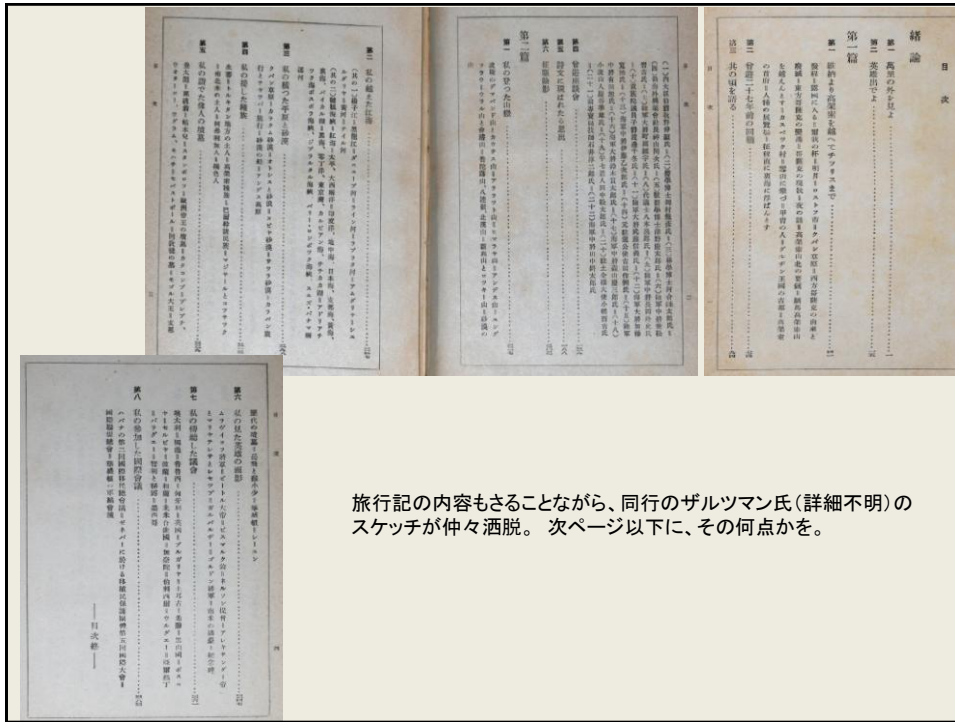


井上雅二：1877.2.23兵庫生まれ。海軍兵学校に学び、1899.6東京専門学校英語政治科卒。1904.3逓信省韓国地況調査を囑託され、東亜同文会の一員として中国に渡る。1904.10朝鮮日日新聞社長、1905.9韓国政府財政顧問附財務官、1906.2水原政府財政顧問支部在勤、1906.10光州政府財政顧問支部在勤、1907.8政府財政顧問本部総務部勤務、1907.11～09.12宮内府書記官、1911.10南亜公司常務取締役、1915.1南洋協会理事、1920.11南洋協会専務理事、1924.3海外興業株式会社取締役社長、1924.5衆議院議員、1926.6秘露綿花株式会社社長。1947.6.23死去。

(以上、国立国会図書館「リサーチ・ナビ」による。)



井上の旅行には、当時、参謀本部附陸軍中尉であった、オーストリア国軍人ホフリヒターが同行した。上は、この書の出版時(1929年)に同国の陸軍大佐となっていた氏が巻頭に寄せた文。



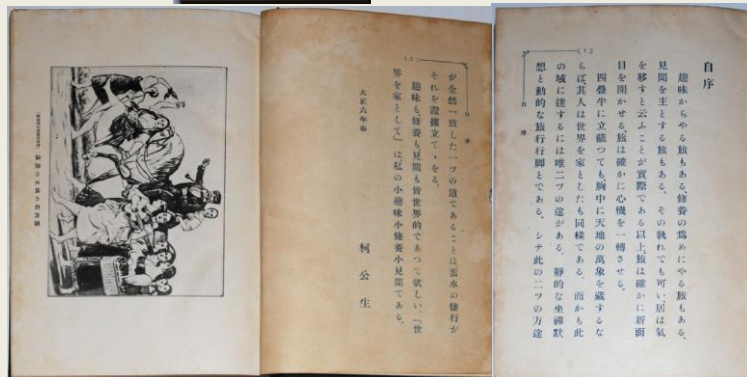
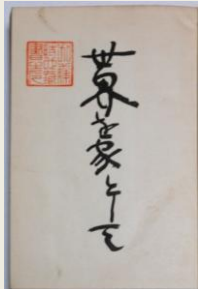
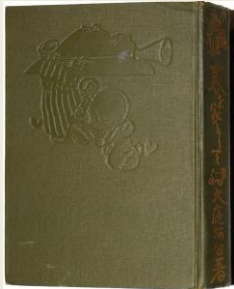
「イラン(ペルシア)の踏査小史とその自然・人々」史料に見る踏査(調査)小史・地政学的位置  
最高峰デマバンド山の登頂とその自然、遺跡と人々の写真紹介」



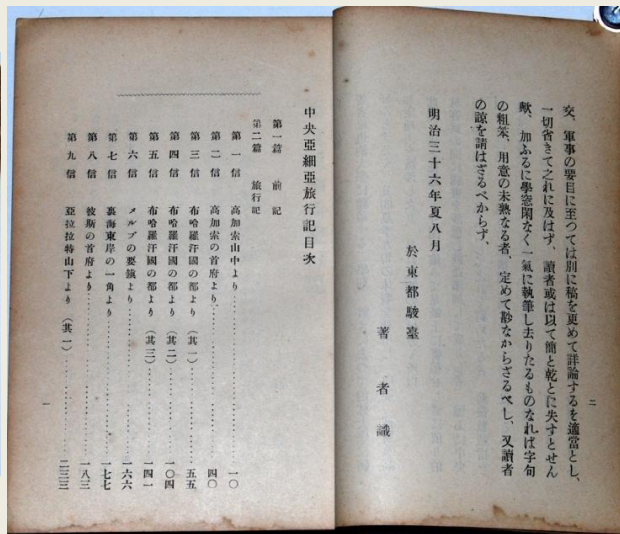
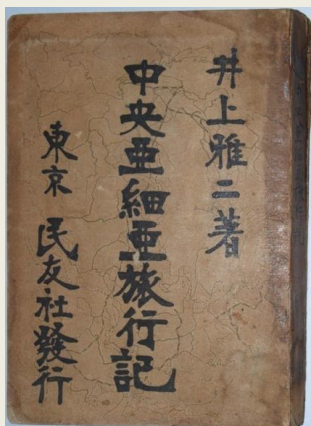
『世界を家として』 柯公、大正6(1917)年刊

柯公とは、大庭柯公で、本名は大庭景秋。

ロシア革命後、ロシアを旅行中に、  
消息不明となる。



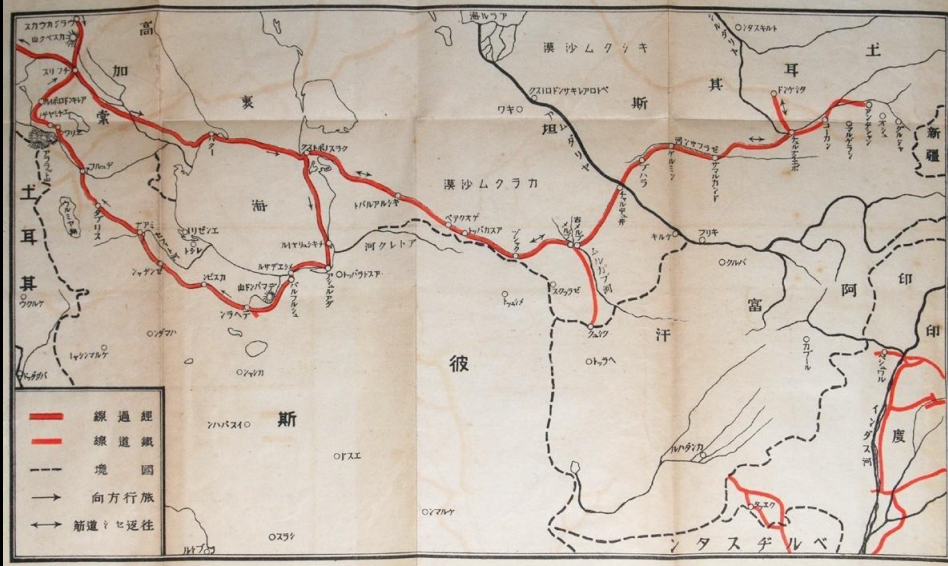
『中央亜細亞旅行記』井上雅二、東京民友社、明治36(1903)刊 (前に紹介の『世界を家として』と同じ著者。)



ヨーロッパから中央アジアへの行程図



その、中央アジアでの行程



イラン国内は、カスピ海東岸のクラスノボトスクから南下して、テヘラン、ガズビン、タブリーズを経て、  
コーカサスを越えてヨーロッパ(モスクワ)へ。



一 其 道軍ソヴェク山家加高



二 其 道軍ソヴェク山家加高

コーカサス山中の険路と、バクー油田の自噴・火災事故。



二其 泉油イタバ



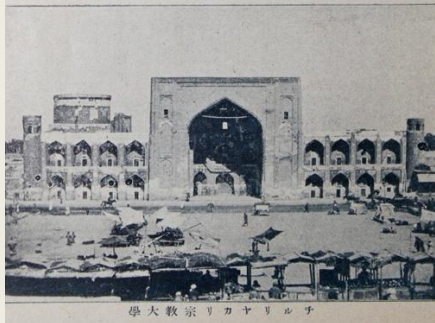
一其 泉油イタバ



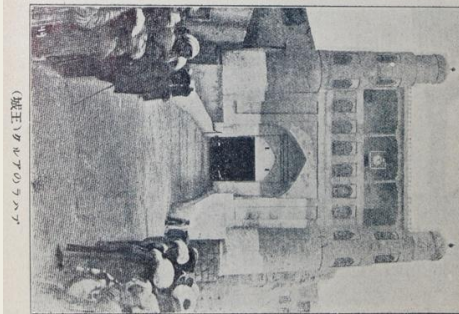
学大教宗ルダルシ



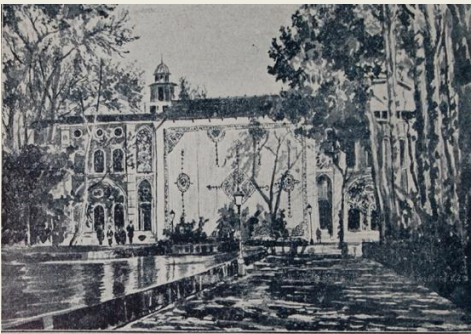
徒囚のラヘア



学大教宗リカサリシ



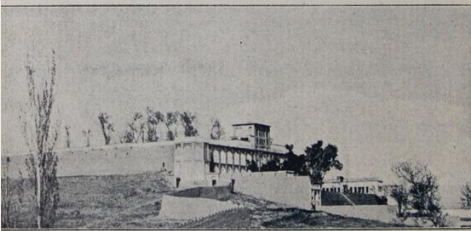
(國王)のラヘア



面正殿宮ンラヘテ



俄首・ヤン現國新俄



宮離ンラムシ外郊ンラヘテ



俄首主教教ヤコメア現

